[illegible]

12
881
5

夕顔　帚木巻並第二

巻乃名の事　此巻ハ哥と詞とにて巻乃名とせり
光と哥の並也源氏十六歳乃夏より十月まてのこと
なりとそ　心あてにそれかとそ見る白露の光そへたる
夕顔の花巻乃名とし此外に詞にも有之
細同之　弄　空蝉の巻と同時のことなりとあり

六条わたりの御忍ひありきのころうちよりまかて給ふ
やすらひに
御息所乃事　諸抄に云出たり後ところハ源氏
乃叔母にて給ひ也古前坊の北方也秋好中宮の母儀也
前坊ハ桐壺天皇の御舎弟也其時の春宮なり
しり朱雀院春宮に立給ひしと春宮を辞退あり
前坊逝去此後にて古前坊ともいふ也天子隠居
しと給ふ上天皇也古前坊ハ源氏乃伯父にとめ

みえし祖御也　河 御息所貞信公女前坊御息所なり
重明親王の北方にある此例も　細 六条御息所の事
論ておほせり文彦太子重明親王のむすめを前坊とせり
大弐のめのといたくわつらひて　私 是ハ源氏乃御めのと也
惟光か母也　抄 別当子の給ふにハ二人有へきか親王の
はらからも二人ある人ハ下の詞にもくちおしくむかしさ
あまたありしかとの中々りけり大弐乃はしつきに左衛
つのめのとをとてあまた来橋乃奥に見んとせし
門ことに尼になりたるを見てまた五条なる家たつねてわた
りしなり　宋 命をたもつへく尼になるなり
御車いるへき門ハさしたれも　細 大門をハさしける也
人して惟光めさせてまつほとを給ふなるほと
宋 母乃まうつる尼す惟光はさるひおりにけるなり

むつかしけなる大路のさまを見わたし給へるに
私 宋 小家のたちつゝきたる也　ちいさき家也
此家のかたはらにひかきといふ物あたらしうして
私 ひの木をうすくへきてあしろに組たる桧垣也常に有之
くわんをたしやをまもんもるもの清きをわたしけり　私 宋 常
乃まてとゝハ皆わろきをやうにみゆるこれハあやしくわろきを
やうのよし也あかりかくれうかりかあるさま也
私 下ハみえかくしたる板あるをおきくうたにさしたるとは
あけてわたしたるやうにしたる紙にて車みえ半蔀とて
あかう色のまてとゝあかりをあけられハそしてやハ見ゆる也
細 下ハたゝ板にて上を蔀のやうにしてあけたる也花のあかん
えんるやも車みえ大路なとの車みえ半蔀とて有家
乃中ハ二つひはらのやうにちとあけてみんとする也

まくれたるとも心とまるへくもなくしたるにおりし花をおもひ
つゝきのものからきおほえてそのかほそうらはかなけ
むすめもはかなき思ひやるに　孟　伊与介ならやもうされの新也
あなをそうた心うちけり　花　源氏とのえんなとえんとなん云
はかなきものもゆるゆるとあるまへくのわかしすや　弄　中将の
よしある女なとにおもはれかしかなりかりたる也一説云
さしとめん乃よしもとのうつゝ女とかたるとてはねうを
うつくしひとつる心也　細　中将乃よしそ見ゆる侍り
さきをうかしんとかんしたり二階作の上なる人
くたわる物のほとなるかんてやすらひてなほける
あるめし家にお意せぬ女ともの有る様也
清車ともいつて遣し行つり　花　思ひあるきの也
さたもとかるを作るは　清車とさえもやすき人国

心や又変化（ヘンゲ）の物にはかれさもんとの心也にまたと思ひ
ありさまやさしきものをとりまさしれぬとも也
河　西宮左大臣神仙（シンセン）苑（エン）乃良角（ウレトラクヲ）とて変化の物にほこと
きあるかとされのもえまるさ入あらんとあり
さ八ちとはし思ひやつれしし候ハをかほとゐ也
弄　細　思ひ行すうさ侍也
非ゆう者しんとうちさきを居くをゑしりしの此を行るれハ
花　源氏とハ人の事よせや渡し也此鄙にてのうた行也
かと八表とその年やうちるとしはきたるもの見られのほとなき地
もられきはなさるを　孟　おとろくれのやうにおもしろかりし
けしてうはうかれはうゑとゞり　細　おりうゐなるへし
はなられまいけるうけしてやほしはしあきは　花　世上を
観念（クワンネン）乃外也

古 世中ハいつこかさしてわかならん行とまるをそ宿とハさたむる
拾 源氏の椎本にもさうても拙縁也
世の中をいとはしきかとおもへり　細 源氏いひしもむの巻ニ侍
行方なくさすらへ給へし栖をもとめて行也拙縁也
まよひありきたまひける物なり　抄 枝をとめさせ給ふにかさねてもと
さらにある物也　河 宗明抄に云良三位か説あはせて
秘事なれハむつかしとて強不紀投大嘗会の志ゆを
といふ物也此所ハ陣府乃前に有之云々　細 源氏一代乃秘
事也とさまて紀とも也とやいふ物也中にて節
とてしとの内裏の春子府乃前あるときにありとめに
志つるよしとありとのやうある物也
いとおほやけるより心をさもにかひろかれにさらき
花そとのれおもるにえこのうちおもきに派　宗 夕食乃花

のほかゝを眉に似たる也此のり家におる葉をはまする乃
よ縁をも美さる花也　細 此の主独とも代家の所
これをとるにはこの花のことおもひ心ちすをたる人也云々
乃眉とハ夕顔のつかひ蛾（カイコ）乃眉に似たるを云也　拾同
とらかきへに物ちとひともうと云紀羅也
古 うち渡るをち方人に物申すわれそのそこに白く咲けるハなにの花そも
河 此歌のハ梅花也されもまたくさきるかといふにつけてと
云夕顔の花によひよりへられさる也　細 志縁くさき前
つきて梅花を用るるて此り續古今小侍従か哥
きたのまうとをちかたへに志とひとく我花ちて
夕かほの花さての心をとらと用たる也
みをいまんはいるそうる白くさきる花もん夕かほ也
源氏乃一巻の志をえ人に物申也かれてさき紀八祇乃

也とひ給也流くは随分夕顔とハ答へまいらする也とて
河 聖徳太子甲斐の黒駒に乗給て空をかけり給し
に秦川勝一人供奉つかまつりてありしと也随分
薑鶴也 細 夕顔とハ賤しき家にはひかゝるもの也
花の名ハ人めきてかうあやしきかきねになん咲ける也と
あはれ 細 花の名ハ人めきたれとあやしき家にはひかゝれはとかくにつかはすこそやさしけれ
まにいと云家のうちにいふへき事ありとしもあるやうにて侍るとて
やさしう 河 此面(コノモ)彼面(カノモ)也と云ハ同詞也
極仙居ハ遠き事をこそあそはさるゝ也と讀り
古 筑波山このもかのもに影ハあれときみかみかけにますかけハなし
枝 山風の吹のまにまにちりぬるハ花のこゝろの色かはりけり
そのもとの二条院の御時へくにとらしめて詠ける
に後成範卿かくこそ申ける一向にはくも山にからくに讀へき詞也
也中なると清輔朝臣躬恒か和歌乃序に天川(エンハ)このとを
のとをかりまれハはくも山にかゝるへし法也やまをかけ
らと 見顕昭抄 定家卿ハ僻(ヘキ)案(アン)抄(セウ)にもこのとをかりのもはこ
の面かの面也四方にちる心也筑波山にのみよめと云るあ
まりいにしへのともしへきことを也と云る後撰吹のまにまに此哥
の詞也又ことの義ね遠かる行幸之時筑波山に限へからさる
物也紀貫之大堰行幸和歌序にもまてしかも花心
このかとのもにをそひとありこれさしかなしと云也と云
花此卿又柳(サカキ)葉にもこのもかのもの紫なるハ人とあり艶
式部か心にもはくも山にふかゝるへかりける也と詠へるにや
細 流くも山まかれるへからす
うちよりのほりゆく 孔 小家のゆふこたるけしき也
むねむねしからぬ軒のはしとるとに 孔 大なる家なりぬとの心
丘

なり　花こそのゝ棟梁(トウリヤウ)なるべき也と　源氏乃詞也
細　花ある八不棟(アラストウ)々(ニ)　河海八不宗(アラスソウ)々(ニ)と心をわするゝなるへし
まひよつれなる哉　河古　よそにみんくるしさ人々よ菊のも
なまきひよつれよ枝ハわするゝやとも
くちわしの花乃姿なや一帝さわるさてなられとの給へとも
源氏乃詞也むかしくしぬ折よはのはの花乃えんとしえ
なくさまひよつれなるとの給也
この花しはやたるつよ今こそおる　細　なまよひはる門をも菊の
やうなるとしおもとるものこひしるや
はなのふされめる所ハ戸ふ紙よ　栄　志やまたるも云説あれ
ともそまくなるも心可捉也　弄　説同之　河　古道なるや
里戸口也　後撰(ゴセン)口傳よ傳申なるものあるとも誂諧神也
ゆうこなもしくを家戸口なりきと　細　たれや正神なるゝさる

御也ゆゑあると見て侍る也　弄　古(フルキ)可捉也
黄なるすゝしのひとへばかまながくきなしたるわらはのをか
しげなる出てきて打まねく　栄　童女乃さまのちひさく如し
白き扇乃いたうこがしたるを　これよとて奉らせよ
孔　焼物とハ香たきしめたる扇也　河　後成女(ムスメ)説あり侍とハ薫に
見ゆる也一説白き扇のはしのきこなりし
花　焼物よしめる心可然や下の詞ようつり香いと見えて深
也あり　細　説をあれと只焼物のみならひよしめたるなるべし
えならぬをなさるけになりめる花とてとりをらせたれ
孔栄　夕顔のはなにやとうかゝる物のあれハ扇よのせてやるゝ事や
門あけて　細　此詞随身花を惣(スヾ)に奉りけるを又惟光思
ふところへ惟光つとなりてまうでたるにてなき也
やうの出様をいかぬにあるまや

惟光の朝臣のぼりてきこゆるよしにてまゐりしハ 抄 随身なるとみゆへし

ふかくもあらぬ事なれとも

うれしくもさふらひ侍て 抄 いろこのみの随身へし 細 惟光か詞也

いとあさましきわさなりや 哢 不便 あさましきといふ也

物のあやめ見給へわくへき人も侍らぬわたりなれと

抄 哢 源氏の惟光か家ににやとおもひ給ふともみえよくみ給

ほとの人はへるなれはなるへし 河 綾目 黒目 文目 文と

あやと読む 毛詩曰声成文（コヱナスアヤヲ）

時鳥鳴や五月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

清輔（キヨスケ）朝臣 奥義（アフギ）抄（セウニ）云 黒白（コクビヤク）をもしらぬと云やうの事也

河してそのことくいひしれ事也かの猿の羽ハ手綴（ミヤリ）を隠

にまとひし所ふるまひの二ツ六文とをもてとをしも

うるそいふことゝもしそ古人もいへる兼盛（カ子モリ）のわく山の

ゆつるはゆてわかれんあやめもしらぬ雪のふるわたりにそ

難陳（ナンチン）蜜勘（ミツカンセツ）抄云 定家卿云 錦織（ニシキヲリ）物を始て亀の甲ノ貝（カイ）れ

うきまて文あれ共わさもくなし 綱（アミ）の目 籠（カゴ）の目（メ）紋（キヌノ）め布（ヌノ）

めなとのやうなもの文あまくみえしわかれくるしぬ時ハまた文

と目その見わくることをさかやうにみるも有り心をもほまくし

まいふてひさしく成ぬれハその物のもとをととこれへあやめなと

のわきまへぬとあやめもしらぬと云とそやされ

なうらしきわからさる紀相らしましてと

抄 哢 そろしくしきさ小路（コウヂ）や

しこもの里やもと 哢 はくさひや也 垣（カキ）ある家まて惟光迎

えさへくわかり給 細 源の車引入あわするとの給也

惟光かあたのほうもとこのみそのうちもとそめるとわするとは

とひさるかとに 細 此四人大弐乃子也皆はとひあつる物也

を源氏乃語りていとよ須か也
かくわりしましたるよろこひと又あはれ事にりしこまの際
孖宋
二ところもなくハうそれとの心也　河一説よりまうさなけれ
源氏大武乃ものとれ家にわりしまりふて僧なりいまうなが
うつまなり也ふとうしこまの頼ハかくしもとなれ也
尼ミえも名ひいそまてわしもなれ君なれとむとてかくく
思給へるなり八　宋　大武乃尼の詞也尼よなりたるもとうへの
ゆるまじ給る也法語んとる紙そちわしさとも也
たうかくわまの人にちけてひ法語んせしなくふとのううり給るよ
むことをうちわしう思ひ給へきなるなひしうせ
孖宋
尼よ成るをとやましく姫君するとの心也　循豫
細
さ夜もとうちたる君なて八源氏乃法あうきなるとに鉄て
ましくまいまと法そしめ姫君をまそるうなるなく給へきと思ひ

冬まなりひし也
いむことの志るしにより見んなりて今むかくわるをわりしてに
とも見給へ給ぬれともいまなりなんほそ法の法をうるをも心さうく
まうれ給へきさなるを少まそて
蔴生　活同　細　尼よなりて八斎戒とさまいけ也
孖宋　髪とわろし受戒まする也
よろまをなく日てろわそうるをかくく物せしまくをとやましくうく
にあけきわるをはるた　宋　源氏乃法詞也尼の勧楽と
やまなくまてくり給くとの詞也
かく世とも成るく心なりに物し給へハいと哀よ日わしうなるん
細　さ夜をとうも心まする事也
命なかくまの　細　家昇をきなるともさきとめ給へきかをと
ふとも見給へとも也
たまゆそうなきとうくなるとも見たなし給へ　孖宋　源氏乃官

位の事を仰らるゝ也
世乃中のつねにもかもなとハ生れ付たる此乃世にとゝ
まり給はゝさぞ可然事也渚こくあまの小舟の綱手
細
丸の上の生也として何とも沖乃浪風をもしらぬ浦
に住ひとし近き事を寿特乃翔也
かなしきと云にめのとゝやりし此思ふ也紀
あるをハかなしとあるとの心也尼乃心也宗綱手日本紀
同
邇延喜式頓同細かなしきハ頓也頓ハ真の心切ろうなる也
かの字清く讀むへし河海抄さあれハかなしあるうたる心
也といふへし
人をいさましうかみにみ給はんと物を細かなしきハ公許也
かなしき物がたりに乳母なとハ大切に思ひてまも
りつれなほ也

ましていとけなきしうなりさんとはなきつりあんなる
にそうしさかきけなくて猶なき母のうめれはとゝろなる
たらなりあはれさひつくきるん宗綱手を
乃物也なれむまふひさるん也
なとも是いとなえるとはしきとひく細尼になりさると後
悔もるに仰なるとて家とともに行きもしゐと云也
そむきぬる世乃仍なりにしたやうに沙宗なとハ大武乃尼
に成るとも心の仍に不捨むかし給うに源氏の
浮浪せんとやそしりてはきしろひめくりともとはる也
ならしむるを浮んせしれ仍をつきし浮ひめくそは源氏を
いと哀とおもわれしきみ細頻と云ハ頻單字也頻單ハ眉戚足也
ひとはくるなる物云也はきとなるひ河窃にしつき
翔なりきぬ許なり

九

いろあひあてなる程はさるべきくれふしもて物し給
にあるなるべし　細 源氏の詞也三果ありて更衣はあまたあれど
果ありて 祖母はまだそれをしける也
ものむつかしきにまかせてやうなるしうと
ならしも　細 左衛門のめのとにとるべき事　末摘花 源氏乃めのと
見くたり乳母の負数に乳母に見えしさまに
きこしめしひむかふるをもらば又たくなんめれ
大弐とよまれてもしばし思食すると也　細 大弐の乳母
とい中にて又たくしかるとも也
人とありて後ハうきことのあれど親をはしかと大弐の
まへにとかしひまゆはるうハなきかれと終へしなきめんせ
ぬ時も心ゆるくおほゆる哉　孔 源氏官位あるとも見給
てはをしつくしを清方の我にて心也

河 髭史記 為人 同 長性 同 為性 同
さしぬ別をもなくされど為へらぬとしやうにかなしひ給く
とものかひ給へる袖乃かわひともえわなくやうと見ゆ
ぬるに
右 世中にさらぬ別乃なくもかな千世もといのる人乃子のため
よに世に思へるをとしするる人ハなくぬ人の見えもそくきてしも
孔 源氏の清ゆをとせよなくひとるれ清おのりきて一世
らぬきにし母をはかへかへなみとてもとふとも
尼つれとまとらしせ見つるまでもみなわれたまへれあり
細 前ゆいとみんゐるにも思ひくはゆきえらひはらるみたまま
まへこあり思也
もはるとえくもしむるなれまるとときての給まこそ
給とてそれを何まえうめて 終法 行持也

細 行とをしめらるゝ也
あけける扇清濁をわれしもておかしあるかの書にとを
あからさまにして 細 されはこの扇はやかて清濁をもへこと
さやかなれは乳母と同し様の態なしぬやかなれと見えさ
しとさてこれにつかひしつかひて御様とて見る様に
はさひ形様也 宗 源氏の此心きゝと寄特也きんえ武とふ
らひ持て扇に心とりあるそてと清濁を感ある事
をあんかとなし
打かゝりさしひらきと見 孔 ちらしかきたる後に見
心得てにされとり見る白露の光そへたる夕顔の花
孔 此哥源氏にあひおあると云也いまた見んと云つまりて
そるなる哥なれとさる清らかなる也夕顔とか
のかよ下にまうもとある也 細 人おそてにといふとしあそてにと也

源氏見て打わらしまほと指しつるによりて花の名を
よひつる也はしとてつるやうなれとも打わらひたまに
かゝりて出しある扇なれへし花なる夕かほは女の名有に
よそへあるよめる也 此義いかゝ也 おほつかなし
河 夕顔の花を美人によそへてよめる哥といへる説家々にある
ねむせける花なるに似てかゝる夕顔の花ハいやしき
やさしき花なれと女のかほになよへあるといへる儀
細流にいへる 毛詩 歯如瓠犀也といへるもの美人の
歯をいへるこの清にかそえてへあるにもあれとされを家
の心に入ぬる説へしとや
うこもなく見きかしまほしくうしそめ 孔 宗 哥をとめし
あれやうにみれうかゝりしてよる也
行てみたにゆへはさそそれハいと思のほかに打わらひ給ふ

孔 みれはかゝるゆへくしきなとそ可然との心也 又うけかし
き御事なり
惟光はこの西なる家ハ何人のすむそとゝひきゝたりやとの
御尋也　細 源氏乃御詞也
れいのうるさき御心とハ思へともえさも申さて
　細 惟光心つくしをハ思へとも也
この五六日こゝに侍れと　細 惟光詞也
ばうさの事を思ひ給へあつかひ侍るほとにとなりの事ハえ
きゝ侍らすなとはしたなやかにきこゆれは
ばうさ　病者也
みつしやうとてとひられなされ也 此扇乃ふさはぬへきなり
ても此家にかゝるものゝ心えてあるとめしてをもへんかの
御へし　細 源氏乃詞也　孔 惟光もまてぬよしやをそう

ちはやとくにの給ふとなむまや
そく此宿もるとあるうちのこゝうとよくとむやうめいのすけ
なる人の家になん侍ける　やうめいのすけ
弄宗 揚名介ハ官也此事物語乃三ケの大事其一也秘事不及注之
花 奥入云此事九条殿の御文ならん又ゝ乃世の説
不注詳国乃介也ミと九条殿ハ日輪入道関白の事也河海
にのせ給ふ事葉あやしう注り別まこれをたるはへし
揚名介（ヤウメイノ）
男ハゐなかにまかりて妻なん若く　宗 揚名介乃妻也
事このみて　弄宗 風流なる人也
はらからなと　腹族（ハラカラ） 兄弟　日本紀
宮仕人にてきかよふと申は　細 宮へ奉公する女也
まゐる物ともとはる也

くらしかね事ハしも人のえしまたしぬすやわかんやさまも
はしもその宮ほく人なりと　さしハその　私案　はしハそのと
云詞也　源氏乃詞也
あるましきほり　細　かやうの宮つかへ人なとの身をもうけすて
かやうの事なると是積りてもたちなんとおもほすにや
物あはれなる郎と　案　源氏ハ事とあふせたる心なとある
めさましかる人さまなとあやしきほのやかしこきものとも
私案　さる給ふかへしもある人のさまをかしき也
はしてさそふ給ふ心乃かへりけんもをかしきかな
細　かくなるとよひてをかしはしとあるを思ふと
源氏てふかうしもと云ひ給也
まいの此也なる法はなしぬ清心なりけり
桐壺乃詞也　細　ぬきのことハ郷かろくしき清御と也　私案　草子也

清少納言かたにけるかな　私案　若ハ物とまうしをさへてあるとて
てもちたる也　細　清少納言かくにあるさまに花を撰
乃詞書を記あるを
あしぬはかにうきうちて　細　弄　ましとかれへ給也用心ハ
うさも若菜也宮に相木乃文のかれはなる人かるき
給ふし源氏の給ふも此心也
ようそてこそうまうせともみあたきまにほのくちかる花乃筆
私案　よりてあさましくそせよ也とひある給也落葉女かりちゝ
つさきそれとの云也　細　此文字わりそてたそとある事
をはりやうと不用之よろしきとハ跳ちかりきてこそ
とや也なれもそれと云心也かへ給ふとあまう人よめりの女の
心あそにてれもとそみる也かへりに若そてされてたえを
よめる也　弄　同之

あるはる清女といふ人してはかなにまよひぬはきみあかり也
道也いひとよろしくいひおてられ給へる清らなるを見はへさ
てけしきをみるしかる哉　抄 第 女の随身なりきほしきを
をくりなるとおもひく源氏をみたてまつりしかるへくて貴きま
いらせけるに清女音をとてなれハいろく也といひしにたやすう
に今わきと清女も心ひかれけんもさうひに心ひかるゝ
よし也　細 此て源氏を見たてまつれも見るに清しと
てちとさしるとさる様子ありしか也ことも拙き心の情
ちゐもと見はへらしとしるゝよし也
いゝへ給ひて稲色なれも御なれしとも紀行
細 此て清女事ともあはれと云風流(フウリウ)に打ましいにまよひ
みやうにわきとうまし給清女音によりて心ひかるゝとみ
る思也

わくわきとめかしなれも　細 さいつとわきとのやうに清女なる心也
随身人の事　抄 もちうたる心也　河 嗟
いかにゆるしんあるといひしけ哉ゆめれと　抄 又清女事といふて
せんといふひきゐてるへし
めでたしといひてもいへん心をまいりぬ　抄 清女なるをとてや
さてけるをとふとくしきいふてを随身の心ひかるゝ心也
細 又清女事也人きるゝのをあはしとやひく清随身心ある
ひしてうちとくまてかたり来るとめる也
清き節の松根のかくいとめでたし紛なく也
てある也　栄 清女の松節(セツメイ)也
記るくあるとみゆる是乃ひかりを望よりきにほのかにも哀あり
栄 きにを猶也望よりきてはけりたる也
點 一万葉 仰始 ことにとりあへ　異計(ケナルハカリコト) 日本紀

清心院の院は八未にちかき前栽なとある人の家のことなり給ひし
いとのどかに心にくくもてなし給へり　弄宋　六条院の御息所の
事也古前坊の御息所なるによりて前栽なとおかしくある
ぬとなり　細　御息所の御心也思ひ給へる所也
うちとけぬ御ありさま成るとのきこしめしとあるに何事とする也
こそねびまさりし御ありさまも思し出して　弄宋　御息所の実
なる御心地に夕顔の君にのみ心を出してしを也
給とめても見給へねもえ給ひて日高しとみる程まいて給
宋　早朝乃事也
給ひての御かたちへにこそ人のめでたへなどもありけりとある給さ
まつりあをと　弄宋　朝明形（アサケノスカタ）万葉　又　旦開容儀（アサケノスカタ）同
方　残せここのあさきのまとふこと給みすてもおかしく御人と
涙ぐみていとあはれに思ひ給ひてこそあはれに給へ

あとは五月の前のかげ給へる事とそれぞれ給へん
わかるとあれとたくもなき一つに清心とくまりて例のほとく
のすとりなりんやとや　弄　前とも清浄して見てあるやうり
なれとも彼方よりせたる一つに清心乃御ねる也
細　此事藤乃遊行也あるくる給ひ此事をとまりなんとり
給ひし後八んとどめてこそ給ひ也
ゆきてにおほめくものを常ありこれに日ころありて見れなと
新　東海の御ひめてかなるとよりとろしもなく此思と
此也せぬ乃恨みるとも同るへし
さらにひかれる人なほよりもとにかれはどくかん給ひあつひ
てなんあるとかくしもちろくありよりて御
さらにひ給人　細　大弐乃めのと也
おほせられ給なんとありのこととて給へる事のかたにひきそ

まきれなりとおもふへしとそ申侍りし　細　惟光か詞也

けにと思ひ五月のころほひより物し給ふ人なむあるへけれと

孤宗　頭中将雨夜の品定の時語しものかたりにてかくれつる女也

夕顔乃上也よそへてつかはさんとて宿へ光うつり行也

細　又月の比より隠しおき給ふ人ありけれとそのかたにて給へり

かく許しからすあるしもなくこともしらすときこえし也

その人とはさらに家乃うちの人にたにしらせすとなむや

ときく中かきのかいまみし侍るにけにわかき女とものすき

かけみえ侍る　その人　細　夕かほの上の事なり

夕顔の上乃めのとハ揚名（ヤウメイ）介の妻也むすめ也　弄孤同之

しひらといふ物かことはかりひきかけてかしつく人侍なめり

孤宗　褶つくるとき是ある時うへに（ヒキ）かけてさる物也　良人前

との前に出るとき時宜にてあるへきもの也　褶（シヒラ）

仮事（カリソメ）也　河宗花物語云　女房やうの人もまかりなとは

とのゐしけることもありつるゆへはきせたり

夕日乃花なたてかくれ侍しに　花　夕顔乃宿ハ南向の家

西うけをうくる家なるへし　細　西むきさなる所と見えたる也

文かくとてゐて侍し人の顔こそいとよく侍りし物なる

ひしてあるへくも思ひくらからなくさ侍るをとなんきこゆる

えはへるを申也　河　夕顔の上也　佳人（カホヨキヒト）日本紀　孤宗　一文ひき

まいらせを行てきこえしやと思ひうちさま

そひほのめかさんとの詞也

かねてしおもしろき人をはかのほとこれと詞をかひのほと人の家

こきめてかのしたる所なるとこそかへもことは心はらんも情

あらくなしくなる人々も人のさまをひろめ所にて家にあるとさ

まぬ人をこそあるまのをくこれをましらは月ゆる事ととらひ

宗 惟光か詞也　細 惟光か心中にはやむことなき御身
またとかくかろかろしきさまにもおはしますこのさく
ひかる人をもなほさりにもとゝめ給へきと御ちかなる御
思ひすくとも志給ひてよろしと思也　花 同
また見給へうる事やあるとまきれおはして侍りて
せうそこあるとはかりしそゝのかしありてこゝろさく
此事あるとし給さいとはかなしうはあらぬわか人ともあまた侍め
軒とゆゆ近き　宗 惟光か詞也 夕顔の宿のわたりとには
ととのふるにはあらぬとも見ゆるとも也　細 惟光かみえとはゝ
しれたる也也
あれはひたれなるとはかなくしつらひなんとの給ふ
細 源氏の詞也
世のつねの人のえひあそそしはつるなれとその事た

よしなのかにくちおしうはぬとこゝろもえかへりつゝも地も
顔をたちしまうさ　花 宗 雨夜の品定めのよし源氏藤式
とにとうしやうさん中になつかしの人を見いてゝまうさん
あるらしみる人をしのもの事数なや　細 彼家の事なとも也
かのうつせみのはかなきさまをうつくしうはなるあたりにも世の人かもにたるひ
あやにくにかくれたまひに　弄 空蝉の大方の人のやうにかく源氏よ思ふ
さきなとし給うあらは源氏も中くやさ給はんとおもふへき
空の心也　細 貞節とはよくたてゝおる心也
わらくまつしきは心ふるし地はやまちふかくとやきめく
さとしと称さくまゝてやこなんとおもふにくちぬわあし
弄 実かくは大様なる心也ないくしうくやしくて人かな
思きさやもとなる女といふこれを又みれするともあるへきにすま
心くるし地おやまちの出く成とも也　細 ちくみて思ひ大あう

なる心ちなむしてあるへきならむ一夜のあやま
ちならすやとぬるをおもひとにわかに負言をそへつるやうに見
えしなりとにくゝ思ひてまゐらせし此心かくいひまてて行もぬ也
くやしのならくまてて夜をわかれしかしらためをはるゝと
前なし源氏の清心をもはかさくの人まてて八ぬまはしらう
さうらしに雨夜不定は少なくひ行てよる也後くるさなく
年ころとうり給清心をと也此列大人乃耳にきこすくなるまし
をとこさうり侍るをわしきにみ也　細　下の品なるとも真ある事
乃あるまし夜雨夜の物語すし宮給也
ありし伊予乃志れ清さめ乃後　細　大人ゆへ　細　なるまし
をとこさうりたましきの心ましめ也　新　旧同之
いふにも程なりしなるまてなくあるにいとしくなるすくなき
ある清心なあらし　いふし　抄　心ましとる也字つくし

ゆくし沈るとみゆる人へし
うらもなくよろしき君にかへるかたつかへの人とはされと空蝉
さぬみつともあくねと　抄　折しの萩乃るやうしともなくさき
折かへてにみてしものと云心也
時をほめてみさてわうさんしとのすさうしされと　細　空蝉乃
こまやかなる沈みあれたる清行乃也
見えぬさの事給をそくてや也知(?)物を捨り　宗　空蝉乃心
とみえて雨夜の品のいけとも也
体あるのまとをのかるぬ　細　空蝉のまゝ也体をそへてのかる程へし
見えぬそれをいはまるも　細　源氏へつとさをさまつる也
あれたるの志るさとてもとうしくろをやつれぬるふそらひまうさ
いとふけらに心はさゝるすしされとへといふ所からぬまちうり
かうらるとほめされとさらすまをかでてたるなるしれなし此

はさてるとそありける　詞ひされと　宋年老ざ也

年頭人　綱行

くにの物語るとやにゆきさきいくけとまてすりしをおほ

せとはいふくすちめくて清心のうちにおほしくるゝすと

ほとくなり　ゆきをさいいくけ　於中河乃宿かくの空蝉

乃基うちかりし時湯きさのゝ事と思へり　いされハ是と

見給おふるくさえもゆかしと也　細　国の物語乃はいてに

思くぬけでても之蝉の基うらし時乃事と之給ふ

心乃ありてえとひ給ハけると也

物さりあやつれる物と覚しとかくえたきたることもなくるゝ

給めるかひそをさぬりや　弄源氏乃自身のくゝり見まさう

つもりのきとめ酬へし　私　物と思ふと是空蝉ハ源氏より

年まけたる君もさうしたるゝへとしあてゝくさうみなき也

みなこれそ女のめなしぬかさきを見へりるとけなと

細　見へぬなしぬやへやうに空蝉乃貞言あるをいあて云ふハ

君心のうこそあるこぬくあまり物語ハ色とけくへきを也

むかしのえを乃いさめおほしいしてぬかとおもしきさにはまちる心

見給ふされと　花　西殿の物語乃似の事もよそそつゆる

むかし女は心とくもを給ふてあり空蝉のゆきハさひて井にまふ

そうたるへとかくえすしてなのめなしぬるくともある心とふ

ひなしゆれハはまちるかんの様さきとはとゆるさるゝや

うやえを　細　西殿は女の事ゆへ乃さけるとかきうしてや

人乃きとめを何されとおかりしなさる　細　我は雅面を

保与るくさめありて可就とや

むきとめをとけるへきくへはおりつきて　細　新もの萩をとい

ねまはれてきるや

少のこともなくてくるをねたう思ひ給へり　細　空蝉
ともえ具しゝ御下心也
一つをかしは　孤　空蝉と軒端の荻との事也今一度を
さてにくき空蝉も軒端のまちさり給ふ人もとより
心あはれなるしきてとつきひは見給ふに君の事みやと小君
とかくしひ給へと　閑章（アハタヾシク）　憂（同）云々
人のあちうを何もをかしん事なくむもかりつけたくし
ともさされ給ましきをともし御みきうちにとてしと文
さはにもすて捨ても思ひなん事もいと口をしくひたく
にくむるかる人しも思ひもあれさり　宗　空蝉のつれなさ紀極也
うつりまきらるにたえひくはなへさわりくの語いへるともおかしか
しと思ふに　孤　空蝉の那由心なきて又源氏のうけ給ひん
ハうの御つきものみや　細　文の事とちるをおもひとくもかへ

さくへきとと空蝉ハ思也
あけの筆はひとつきたるさとの葉あやしうらうたきをにぬ
とまりるへきかつくくへるとしてゆかれとをおほしぬる人
の事もひるれハはまるくつり花のうへくさきよ思ほさ
あけの筆はひ　孤　あまを歌の寄する事也
と一つをもぬしはいくあるとをかりつとをもぬるて見て
しき情ある紙をのとて　孤　宗　軒端の荻ハ男出来たりとも
何時みてもあひくる人なれとうてんなるとの心也
昇人の性の見てしあるへ心へし　細　同之
とうく思給へと心をこうしてそ来なけ給へ　人にあつきを
てといひし事也
秋をと人やなとあくは心はつくしに思なくみるゆへ事ともあ
りて　昇いとくるしひそ付なり也　細　只源心くるしき物我

乃御手つ宮蟬のことかゝくんけくしも
大殿なと絶るときゝけらしめしうのゝ思ひをなり
細 葵上なり
六条御息所とをかゝるとし清事しきとおもむきをみ給ふし
行て後見さるし　孔栄 御息所ともかゝるらしとけり
くゐひまなるう行て又ひさしう有て吉行けん至いと
おもしろくしとも　細 清けりく心をとけくさ絶しけと有
葵上と云給ほと云はなるとも
あつめあらんハいとおもしろう　栄 あつくあらんや又古代
さらにあらんハの御也
清れとうそたゝりし清心をとひのやうにおもしろあるうけ
かなたとゆるる事をしと見てさる　花 花ハ前坊の女清か
とのやうにあれうらたゝる清心まとひ生さるなれはとゝ六条

かるとのことゝと云ひおはゝへ行也と
細 清息所の事　孔 らうくおりしときいて也花乃院ゐ
女ハいとわりとあまるとあるまて哉御しきあるは清心行そみて
細 清息所也此わりめしたる心至まゐりへきけとそや
清よもりひ乃はとゝとみをあらく人のまゐとるとむまいとくかくつ
らん清けよわれの　孔栄 源氏十六栄清息所廿四栄也排巻
千清息所三十源氏廿二栄あり清息所卅八源氏廿八
乃見也　細 栄同之
御さめく御ほしとあらて事いと清すくある
前坊乃清息所ハ秋好中宮を生奉し後御おくか
路し給ひ今又源氏乃かよひ給ふ哉又秋の世になるる
事あるとわりけくるゝ也
前乃いとゝあはれあし云と　孔 清息所へ源氏得出ちくる

給ふ大内にもまいるへし
いつくそのかた違へ行ひさく福なりきたるかたにまかるまゝに
出給ひしそて給ふを　細　かれかちに御くるまひ行なりなと
ねたしと思ひぬと申てそしらせてられてさきのはしにて
給へし　孔　定乃ゝもとゝきさ給へと清少納言
中将の給ふとみえしひとつあまりて見侍るとゝめ給へ
とおほしく清九条にさやうなれは　孔　宋清少納言乃女
房なりと清末下ひさに尾うて源氏と見人をうらやまへき
のなしとさなれも清少納言もあるまこく見んとてゆ給也
細　清少納言乃官女也
清少納言もあはんかんつまし行ふ　細　清少納言也
せんさいのさかみゆれしる状とみえかくにやうなくへいかなる清
まさにみちひあしきかうくあるひるに中将乃事也

清少納言にて候　給ふのくさ　ちうちあるへし
いとまきかもとにあひうらゆまの事はさやかにひき
ゆひうなはうつてもあをやうになりたり　河海同
世の常なれはいとたく乃思ひと心はいたる事なり紫苑
とのかはあひたるも様なるへし紫苑なき乃こさぬり
もち物の色も紫苑色は面は蘇枋裏は蘇芳也
細　かはうひ給ふと色とさるあまて様なし清少
見ん色うちふくもこのすれこそらんよまこりちきもゝ給へ
也　見人ちり給　細　源氏乃也
うちとくをさちあはせてあしらくのはうとみえきもしきも
とのはふ　孔　宋　清少納言とはしらくぬとの清心也
さくらはうきりてふかはつめとさもなくてもこきけさなのさ
花
槿は中将の事ふきとあるも花はいさゝかと女はさきとして

たるも　毛詩曰有女同車顔如舜華とありとぞ

細 源氏の中将の君の花さうかとぞや　孔 源うつるてふ名

とハおもくしきよしや中将の君を権ようそへ折らるるに

ゆるもへきとて手をとらへ給へれバいとなれて露ふかく

朝霧の晴間もまたぬけしきにて花に心をとめぬとぞ見る

孔 此哥ハ中将か御息所の御事に中将を花になしてよめり

御息所の心ハはかなびとて花にて云ハ彼の詞のもたへやまを

あとにつきうしなひとハ云ふ　細 好なるを云ふや也

男のうつ色どもかしをとさて御息所のよそよとかし

てらく行の伝源く出路とぞ也

をかしげなる侍童のすがたとにてやかしおもしろき

のこのましうことさらめきたる指ぬきのすそ露けげに

花の中にまじりてあさがほ折てまいるほどなど絵に

かゝまほしげなり　尚かゝる人々ハ　孟 花なるふそ童女と

見えたるをもえられたは指ぬきたるめつらし花出立とあり

色葉あるハ源氏のめしつかひたる童女とみる可然と

や御息所へいふ所の娘の能の様也　細 此童の手引勢の

裁女とて云ハ男たる人さ見　孔 源の語集人ぐ也に

和 只云女の指要とさるふりたる時よろ一首をぞ

る意時も指要とさるも也

大かたに見たてまつる人だに心しめたてまつらぬハなし　細 草子の地也

物のなさけしらぬ山賤も花のかげにハなほやすらはまほし

きにや此御光を見たてまつるあたりハほどほどにつけて我か

なしと思ふむすめをつかうまつらせばやとねがひもしハ

くちをしからず思ふいもうとなどもたる人ハいやしきにても

孔 古今の序に大伴の黒主ハ其さまいやしいはゞ薪負る

深山人乃花の陰ハやはなるゝかたくしらく源氏をさへり
さとゆりことにあらくしきかひをそてたるハ清見寺の後
ま物のきにおもくを得かむことゝかんなるまめいさん出也
いやしなかくもあはれ清わかるとにはつくせんやをもかすもひ
よくぬハあるかあるとまし思ふるとぬへきはつその清あると乃
をかくもあつくしき清をしき紙入て末深人のもとうし物の心出
ひたるはかくをとろくにさひゆかのらん　やしきさかくさ
孤　いかやうの心思ひ給乃根本ても也
此夢うちとをそてしとゝをもぬと心をもとちなむあとくにふ
むかめるも　孤　宗　源氏の人をとゝもを給ひての本はうちとを
てをもわりしきぬるかとかひり　細　聊なる心をこえを
と心をもとちすく皆物はさ也
まとしや惟光かあけるを乃いまめ見んハいとよくあるハかと

まてやは　孤　宗　夕顔の宿に惟光めしつかひを付ける人
のこともありけるをもしりるをもしまやまとさもましもふて
けるかもそとこしらくひあるつ詞也
その人をもかくにもおはゆ給くは人にかむへしをかくれきの
ある家しなにあんみし給を　その人とハ　宗　君されとも
らぬ人也
はかなくなるまてにみなもとのらしきをあふ　細　はかなくの
おに車なると音をされもいてゝのかゝかなるとはい也
あやにわろとさく車の音をされハかゝかわ物ものゝかゝかな
とともをかめるにころしう也をあつもとひかるまの
給へめるかきりあんはのかちれといとおかりそをに給はとひ
さきさをひてわたる車の給しとのさきてましうく人乃いそか
まて　あくや　和　中（ナカ）居（井）乃車をかひり

河 俗に中居と云也やや又音通ある也
右近乃君こそまつ物語に有人 師 夕顔のめし使ふ女房右近也
中将殿こそこれより先やさしき給ぬれと云へき 師 宗 頭中将
のことを云也夕顔は其前に頭中将と契りし人なる故にやし
はなる人を見志りたる也
又よう〳〵此物語を出して 師 宗 右近より別の年を
云る女房達を見んとし侍り
あかずちとて物く物く 師 よそくの人の云くふとあへ
くるしきとてくやしき也 細同
いそぎさきを云て見んとて 細 頭中将とを行とし
あまき源乃云也
うちつけに物語と思ふく見んかうの心得
也まとうに見ず打橋のうち橋とも御渡し 河 打橋こと
師 宗 内にわたる橋

河 宮の山にたびにやうへ宿りまのゆるもとやも打橋こそ
細 此中屋にかよふ通りうち橋あるも
いそぎの納ひきぬ乃もとそてと橋に乱きうまくて渡りひた
うまひあやしくもれぬへうれし いそきたる納
細 物なり心ハさ乃也出ふもたる也様来り石を子をあると
師 宗 橋より上とをらぬ急を見れハ彼浮乃無用れ橋といふと
そこのうはしきの浮橋を渡りたるとさまれと
とし玉ひとちとそ云渡る也
岩橋のうへの契もたえぬへしあくるわひしき葛城の神
むつらで物乃そきれ心もさめぬ也 腹立たる心也
師 宗 君ハ清水にしもてくらすて見んもいへんとよらおもし
此中将の事也情なうめつけのかたらふ詞なるへしそれと
又源氏へ情なき也 細 夕顔乃宿のおもてちか車よ

のぼりたる人をみてくやしきも　抄又夕㒵の宿の童とさして
て中将殿とよみきあるなり
なにかしこれかし也かくへしを　抄　皆童乃詞を惟光語
る也童乃それかきうそへたる所也
惟光のまをいふん　細　惟光乃ことものまうけ見んあつく心ある
てに云也
その事を能うかゝひをとあらん　抄宋　是中将のめしはなて童を
中将乃めしつまさらしいをと小舎人童也云也中将おわ
とまふ情るにや　河　小舎人ハ童の名也
来るにいひ待しるを中乃由ある　抄　まことの惟中将乃情
の物ともとうらへ来るよしある事とめつまとうかまへをなる
やと惟光か源氏をまくさるまやも詞なるへし
そこしれその車をみんましきの折ひく　抄宋　源氏乃詞也

此心ハそのかみの後をよくみんとくるに物をも惟光に
の語也今一條ハ内へ宿人の車なるかといふ夕㒵かこれ
君ハ惟よみんそれの所也是可然也　細　それと惟よみ
とくるに物をとも也
まことの夜まさりし人かやせと此まかしるきもいとまる
と情しきある情も給みなく　抄　是ハ雨夜の物語よ惟
中将乃かるらしき人かやもまちしきとの源乃情也
細　雨夜の物語乃時惟中将まうくやさわしかと源の惟しる也
わさなる此事を乃うるもいとよくまとえておかいもの源不
あくみん給へを紀なるく　宋　是ハ惟光かわさなるしうく
なれ人とよく案内まうけたる也云ふ也う人の情らすとも私
みてもぬ此よくし至とも也　抄　惟光詞先我自分乃事
乃うれしきなるへし

まくまひらなとてきてもて持るとてふかゝるゆもとの花そと
以宋
花ハ夕顔と歌よみのやうにさためしよる也ことにや
八我もしやまうさゆもとは夕顔也花を女房達の心わりと
うき世のやうに人はさしてもて持ると云也それとこまかに
ちかうさうれとわさ也さしてぬしにそうまかれ
してたゝみ使まてふかゝるとありくも情をかへ源氏よりさ
思ふ也又かゝる紀ゆもとくも情をかけひさしかりし女房を
もち給へさうかゝる詞は又人なる紀様とかやう　細　よし人ゆ
とありしもたえてをぬやうにたえる猶りたまふて情
をとさくもや
宮ゆかりてさてたのんちかう猶さかゆありもかくとしてかくし
それもや思ひて　以　夕顔をもとかくしてゆかりきて女房ともと
とふ人のやうにさたなともえ女房達ゆゑこれはありてあり

名とつ也宮ゆか主てに女房の情の心又女房達の心と也
ちいさき紀子ともあるとの御かほとあやまちさりへさと思ひ
きこうして又人なる紀さ顔をとりて情けるも給るとかゝるてそ
らふ　宋　口うましき持なれハ夕顔を折りしてゝぬとさて
侍ろふとや
尼君の子かうひにものせんはいそてまうゐまうしせさせよやとの給
ひ侍り　宋　大弐をとも給ふへん時とも源の詞
うちみてもやすかるゝ修のたの祖とを思ふに　細　やとの心なりや
宋了それもうちの中ありやゆかりまとや
これにてうちの人の心をあはつらしさもの一方なれそその
あり思ひの心にわりきをともあくさるを物語なとありを
思惜しハひきこうのあると情心はそこうして思ふまとの道を
をうまくもそこ心みて思ひしそさてもくるとまうひゆりき

つ　弄　彼西戎乃来宮の時蒋氏宿にとゞまりたりし人八
いとあはれなるらんやうにひしとつきま夕貌の宿のもさ俄乃か
られし思ひ出らるゝ也
志ゐてわりなきを補て申也　栄　夕貌のさまるゝ語也
此頃とのあとくゝつまれ八此いのなし川　弄　此語様く
様くのことはりとても見ゆるよりまとふ草子の地の詞
也是八乃やもいはくかくいとも此事也　細砕(クダケ)　日本紀　白氏文集
細　草子地也くはしく云されさりて夕貌の宿へわりしとめ
はるかとハ紀有らはとも是文注也後漢書蘇竟傳又
與(アタヘテ)仲兄書謀之文多(ヲホクハ)不載之此等注の類なり
女とはしてその人をさかけそ何ともなきの宿をとし
行かて　細　さかひ何に紙注と語也
いとさみやかつれ〳〵ひけり　河　襤褸(ヤツレテ)　日本紀　窶同　同

是八なかれ物とたちありさ語八わろうに此頃活是叙あらん
しやうそは　栄　からさまにのはる也
わら馬とてをまゐらて注とものたましわりを
なり此頃まて八家をはなれかくなし物とも也　細　惟光か
をはなれ乃　弄　是を惟光か物をとるなとみとそとめ思ひり
あんつきしまて八と申されるも　花　姿を厭つくる許也
河　氣装人(ケサウヒト)假相人(ケサウ)　新猿楽記(シンサルガクキ)　伊勢物語注
いと物をなすなとあしきとてつらきまてゐらんと紀かへるく
をみ人さうの姉なるともそれと人はなしく世語をめまて此乃夕
貌のむかへとしもといふらんをまちてハからむきにならまし
きわたるとまたくもかてわりしなからしもひゐるを
しるまやかて　細　我かくしあらく事なんきたしも也
やなりにそらやうなるをとさそれ志語なり　弄　惟光か宿にとも

よそに詞にしてもくに夕顔の宿へかよひ給ふとなり
女をいとはやしも知らぬ女のさまして詞はひとに人をそへ
女をいとあやしく　細　夕貞乃事也
暁の君をとうくちを詞あるもかへんせんや千とせぬれと
暁乃君　孔　別路の心もあるへし
そこもかしこもあくまでとりしはて　宋　あらぬかたへ立よりし給ふとも
さはらぬ心ちしてまはしりこ乃人の詞世よりう
まことにしなん事くかくしきものも押[illegible]かしうあし
さひけり　宋　源の心也　細　夕貞乃有様也
いとをかしくかりしにけは　宋　まとひく[illegible]く[illegible]けは也
うつしもちもて　細　源乃聊も見られ給ふにもあなたとゝも
孔　是よりは源の平生乃性をほめていへり
まめ人のみなるにもあるといとめやすくこなめ給ふし

まめ人　孔　まめ人也世の人のあるるといへり
人のうらめしかる事へとさねまいたひを志給ふ也かへりつる紙
孔宋　是は帚木乃まはれふくかくのおおねよりはしかれ給ひくん
うしやひしことの心と下にあまをそらてきるとも
あやしきまてあさ乃ほとあらさの君にもかれなく
ちと云ひかられ給へも　花　夕顔乃宿よりも御経て乃罪
[illegible]の君にてもおもしろくまし給ふはたまれく
あるへき前栽なくみな当る也　細　源切よ云給ふ事
のかよ云給ふ是なりぬましきおも
かれをいと拘るをしる也　孔　ものくるひしき也
たまて心をもむへきこと乃たまふをあはれ也　細　いかくは
たしゆ心をとてもむへきこことをるれをとも也
[illegible]ゝしきこひさまし給ふ　宋　是猶まそ云へんことゝ

せ思ひさ候もとや　これよく切て人のきもちひとかくし

夕顔の巻也

人のきもちひいとはさましきやうくにおほえ給ひ

楓只ちてに心をとどめ給也

物まくおもれくらんとくまてさゆるにかりひさる物かう

世をとまるさまてぬまゐもはくれいとやむごとなきおほえ

しいはくにいとくりしとうそ御心もかよはく思ほえいと

ことはりめなさて清らうそくいととやつれ侍るるよの清らとなる

まさ候をとくへかとしほの刀をかくれ来るかほとに人と

たつめて出入るをし給へし　うとの清そ　河 指衣 短裳

むりし夜々ん物のあんくゑめさそうて思おかりけると

河中閑白為少将之時語赤染之兄弟女而忌給之

後彼女奉懸少将日暮奏南面簾詠若然間直衣

人音香甚入来彼殿也女有悦心会合其後夜々来

但暁夕無車馬声成恠以長緒付針着直衣袖朝此

緒留於南庭樹上其後又来是鬼魅之所為歟　同日本

紀のちくろハおほものぬしの神の妻となる昼ハ見えし

て夜来やまとく姫の命まつ語く常に昼見

えさせあまくらにみかほとかるとあしかりくハえて

らくとくまれいかなる形をみんと云て君がくしの箱

の中にもくん物ろく事あかれやすとひのおほむ心に

うちにはやしむ夜ゆて慮を語くちそて見るに美わしく

紀小蛇ありおほむ衣紀のなとしおとろさてさけふ附

ま大神ちちてそまちちに人の形ちにありてその

かへくりて汝かはちちみをもかくありて

にもちりんきんやちそて かもとみて三諸山の

ぬまをと略せり三輪の神ハ倭迹々日百襲姫命也
花二乃本縁は海よりのぼり大物主大己貴ハ一神異名
也三輪大明神乃活玉依姫にかよひ給ふ因縁によりて又
よそなるもの三輪の神のいさむる事なるぬとぞ今の物語と
よそなめるなるべし

人の御けはひをえらびてはかなきことも露さへぬやうにさなかりけれハ惟
光さるべきにやとおもひなしてかよひけるにや
なほこのをさな物のしいそぢのはるかさなめりや　細　この頃と惟
光が志にそてたるさまをしるしこの女の様なる也
事いふをとこをひなりつ　孔　惟光なる也民部大輔也なる
故也夕顔のこの女房を定むる惟光をとこさるといふ也
細　惟光也たいふを民部大輔になる故前任大夫といへば
きこゆるは此の家にて民部大輔をいひよりちかくよせてと

此又位なる故に爵をはなして大夫と云也
せめてはをさなくおはしければかまへて思よりぬかたに
孟　惟光が人のこころと心をも御ふせぐなる也
なるまじき　細　惟光ハかくれなき御ふるまひまでなき也
あされけるときをも　細　されぬる也
いかなることにかと心えがたく　孔　女のさまさへ惟光の志かさ
なり思ふる故程しられぬるれば惟光なる事にかとま
ただひさしつ御覧也
女のさまもあやしう隠ろへてひおりしをとなんしかる
孔　宿業とも志給ひて又清志乃切なるよしにや
ありとかくうちたくさせめてをひくれなるまじきをとる
見ゆるまでさしはさまん　細　うちまひてハ内々にそむく
成も此やうなるを見れるも自然にといふ人をも也

てたるを云也　さしあめて　栄　源氏よ地乃さかいを
よりて夕貞乃くれなゐしらしてや也
なほそめのかくれかやたまさかなれハいけかとつろひゆ
かむ白とおけとたへしや打かれよ
よきと宿也　細　此宿也たゞハ暫時乃やとりとつたへた
つゝけてめてゆ正ある人なき也
とい（ハ）よそうしかゆ　細　たゞしにうち捨てハたとえくもさある
さ海るる我うちわむ行也
かのめにかいひそしは人ゟ八えて見しものをさひかくもを
きぬるもれかいとたゞしにさしそてん也おほさまれ
弄栄　夕貞のくれ行ともそのまゝにみとたりふくもくさ
たゞ也たゞまてハるとくるれ源氏乃心とも也
人めと御てもてとゞよく〳〵るとたいひと思

ひかくくるしきまで御ちかくハ抱きまれとなくいめ
二条院よむかへてたん事ぞ我んあるまて御んあるへき事
ありしをたゞるへきみつそを心なくいとくく人よさむ
ちとなれといつたるちかきにそはりきんるとれ
まかしき　たゞるへきにてそへハ　栄　先世乃契よてそ八よみ也
ゆさいと心やらにはかくのとくに常んちをかくしひ行く
く　細　源氏詞也
あらとはやしう　栄　夕顔乃詞也
かくの給人也　細　夕かほの上乃詞也
よけかぬ清もてなし我れたものおもうさしくそあれとい
こゝもて人もかにと思ふよまれ行ひく　まつかぬ清も
てなし　花　始終ハあるまじきも也
常にハ津てさそ日なんか　弄栄　うなさり抓の文こなる

たゞ執也　細　まよひにたる所まへある執也
あらまし〳〵執行人りし也なるしきにの行人ハ女と思ふし
うちむきて行とおもひぬ所ゞかきとりかなくかきえ
ある事なりやとも思ひさきにきて心をいとはれき
なる人と見給ふよ行への路中ゐのかと文ゝくらしくかき
つらし心さ夜まで思ひやりてられ行人と　あきらかに路
色　花　もとの行きし行人のうち路やらく
志のするやうとて八もあれからにもとひきて路られ
れ　そ細かく思すらんと也
もし死なとて事もとらむきかく路へきん行するとハあけ
まけかれくにもそらんとりん行りとて八さやうにあらぬ
事ともあらめ　細　家よ行とも思ひてなひかく[illegible]き
心行すハ見えし行るなる也

心ありくともまさらけりる事あらんとて衣あらん〳〵かれや
行人あはれしきかと
ともかくまされとにさやうよあらても文行かれをとて行
むとおやかてに言旨心也行人とかるにかく思ふらんや
源ハ藏人のもとひや以て源氏乃清心也　細　家まさ見給ふ
はじめ心ありしこと氏女そてむくましき行の志する
ありて我らんあらんともけりくさあらくてれとてて路也
れ　是ハ行しもし事也あはれとたるとひやかとみとあ
の路ともまめと御前ましき路也
八月十五夜くまなき月影にて細くる以てやのとるとあく
まかとさて見るらひ行をぬ行さるの行もとめ〳〵しき
よ曉ちかく成よあるなるへし　秋にてともありぬとひし
より將くのかもありてや　細　陰陽交會(カウクワイ)とつむ日とかう

となりの家〻あやしき賤乃をのこのこゑ〳〵めさましてあはれ
いとさむしや　河　いやしき詞のか　弄　いやしきや
ことしこそなりはひにもたのむところすくなくゐ中のか
よひもおもひかけねハいと心ほそけれ　花　秋乃農業なきを
きたとのこそきこしめせや　河　稔(ナリハヒ)　同　農　順和名　東作　同　嫁穡
農業　同　田宅(ナリハヒ)
小家にて北殿やなといひかはすを北殿といへる　弄　隣家(リンカ)へ
いひかくる詞也
いと哀なるをのみえてあらはにおしはかるへきめてたきを
見ると　花　とのゐひとの世務(セイム)なるへし
殺生をなりはひとするものゝ事をおもひよそへたる　弄　ちかきを
かなしむ也
うちたるをしのひてやすらひたまふも人ハさしもおもひたらぬへきけはひなるの

ゆゑなめりしられたれとわたしのほとりにはゝきゝとうちもかくさひ
けるに事もさらにわかきよしにかゝりてものしけなくおもはれたまふ咎
をいとほしくそのことにめかしやすけなるましくかくれなかりけりとあり
のかゝりぬるかきとはるれはかなき事を思ひたまふるにかなしくも
き　弄　清見(キヨミ)はたゝすのやうに風流なる人ハさくともいふへし
あり　細　夕顔乃上の天性(テンセイ)おとやかなる故といふなるへし
らうたけなる人なれハこの事をも心とかくしうちさかゆくのつゝみにこそ
ハかなけにおとなしく見えてさしもかくさすいとおほとかなるを
あはれにあつかひやすき心のあはれにもかゝれハかくそみえける
弄　此夕顔ハ心もとなきをかしくいひしらすおほえけるにかく
としてもいとよき心ちするにもおもひたまへりいとあはれにひたふる
罪(ツミ)ゆるしてこのましきもあるまし也　細　中〳〵にたえかたき心や
きこえあり

まかりくもあるかたらうたきもおとろへてしらあきくさ浪うを
うつろはの音也
古 夫木ありとよろこびあき稀をおほふ中をもちはく霜枯へ
河 蜻蛉日記云 松風の音もあらくて雨いたくふりたる
かうらはのをともとも 雁(カラス)
松ふく也おとも也 河 松ふく也
おほかみくうしかすのしもこれよりく おとはゆくなどかふのたきさきと
をしめりの遠き路をほかとおやしうあきすし花もとゆうひとの
ときに路ゆくくしたき寺のことおとのまも くさくしき
ゆるくくのおともありし也
あちう書き入りの衣を打ちさぬきのゝをともとかはらぬはちあるくあるさき
きさやをきさ遠きをもふかるもかよひぬる夜かりあいめて悲しひくるちえるす
おほうりりちうたれすこゑありうれどもや里をたきさきは

きほてもろともにとんいてゝ路ふゆとちるに
又 八月(ハチゲツ)九月(キウゲツ)正長夜(マサニナガキヨ) 千声(センセイ)万声(バンセイ)無了時(ヤムトキナシ) 細 只擣衣(タウイ)と云は
てあるを織白妙をうちのへたる優(ユウ)みして面白
庭よまされたるもれ行せんさいの露ハ玉のきらゝとおほし
あとくこさゝの花きさらるを 前は清まてあるやうをある石とい
又たり同し年をてまちひかる竹也 細 枝のゆうきあるとして
越(スク)なりぬ竹也 詩(シ)みと居竹あるとあり
玉の雨くみちろまくりしまくる色の中れさうちくはそたにま
とをよ空をふかしひ行つる清凡てにけしあてたるやうにあるに
みるまで 花 詩(シ)十月篇(ヘン)云 八月在宇(ウニ)九月在戸(コニ)十月蟋(シツ)
蟀(ソツ)入二我(ワカ)床下(シヤウカニ)一と有こことにさてあらしひ行つる清耳(ミミ)に
さしあてたるやうにとあるは床下に入てゐる心に叶(カナ)
ゑり 和 花は毛詩(モウシ)と引て床に入ている心に叶

ありきこは義とも侍らん位蟋蟀(キリギリス)ハ宮殿の内にも鳴もと
にハ蓬生のにも哀なる秋の中にも宿りてハかくしく露も
とめてしまき事に云路へ入し　栄　たすけなる所と都も
しるとさしめる事にもあるも源氏の蓬生の中なく洁
遊へし聞る露の中にも草庵の前とさしあくさとそ
津くなりをくさく荻原とも清ん侍し野辺川の流をしぬり
よ秋河乃清をゆる侍りてなめりし　杙　結句一奥(ケウ)ハ前句の
とも　細　志の切なる故也
中さあるをう清さ乃あまりなる絶へさぬてあれやうなしぬとなき
いと露けくきにあへりなる世ちし由　栄　露とハ心なきとろさ侍りせ
のこさぬまうすなるうれえをきたるもあるうちやハやさくとなき
猶侍きなどいへり　流　桑(ナヨカ)　細　夕顔上乃衣裳(イシヤウ)也其の露こゝろ也
まこせとうるとたてしもそられなるおとゝもあまされと消えやうに

なきとくやしておもひちぎりひるきをもひあるに心のうちしもなく
いとらうたく見ゆ　夕顔をかくものくれなる人とも
あきれとも様粋可能人とや
心ちこたるかことともこし人をうしてかる物ひあるしるに
とうちとまて見えて涙しきおほさるれハ　細　心あるかなや
よしあるとようしきを云ひしきしもをハ涙つきをなり
とちと云ふ紀用にとうちへうれとも源乃よく消ぬや
いきたこのわかるとちうれ流よ今やかしくあをあ侍しかくての
ミ意いとくるしうきあるとの路へもて　杙　六条河原院乃
事也いさとハ侍るひくる詞也
いつてうとそんかんせいとおもつらにいひくなくなりり
栄　夕顔乃上やうるなる心見えしたり　細　河とともうらるなき
なまる侍るや

此世のさだめぬ契りなりともまた後の世迄かはらじとちぎる心を
思ひあやしきをやうやうてうらみたる人をも捨かねて
人の思ふむところをえたるさま行にて　付句　かやうに情
まことらしく清心さしたるもあらじとあはれなる也
けやうてに念日拔け不盡出來なる也
右近とめしつれてといふ心とめさきを行て清車迎へさせ入らせ給
　付句　尤さ八夕顔上ろ官女まとのあはれとなる也
このあはれてとも　前句　夕顔のうたにあはれぬ女房達の心也
かく我清心得しの物ろかなしぬとみえ侍　付句　清志の切なると
見るもあはしき事かく八有まのしきと見え也
おほめかしあはれそのことをもきを申しまも　前句　源氏八心ま
たはあはしぬもわれらかなしきれと也
いはることもちろうあらに常まとりの了忍なると言ふてしあかんと

をはらしみやあはれ　吉野金峯山に入て千日の精
進也。其寺ハ東寺師弥勒也　ころ　慈尊とう
あさとよひきの川上をと朝夕ハ今の清嶽に雪深まより
清少納言枕草子にあはれなる物かさ男の清嶽精を志
ろ次さめきの家人くしたるしはきぬ衣なくろそるるを
もろしたくとふそ思へあるをあとのかにきいしをを
ゐてそあしてむとるまおそうら物こなひたる暁のぬか
の孫々かんしくあはれなりや
た々行さるひろろ色にぬかつくそ雪ゆらたるる寺を
ひそへかるきれとこなふ
額拜也　付句　立るまかつむる所ろうしをあはれしも
いと哀にあしたの露まおとなしぬ世をとるまふともしさはらあ
ろいのまにらとさて能けに　朝露貪名利夕陽憂子孫

なとたらハきうしやそれむもろうれさて給へ
金剛蔵王権現と云釈迦　現在観音　当来弥勒也弥
勒出世の時地よりあらはれ出金をとゝめ給所なりけれは嵩
諸をとよ弥勒と礼まうる也弥勒ハ釈迦乃付属をうけて
一生補処菩薩也そ其十蔵劫のちしめに下生し給て成
仏して三会に法を説給へき故に当来導師とハ申也
此世との事を思ひたまりあるのもはなれぬ所也ひとく
茶　弥勒乃出世まてとも契をこめむと唱ゆうて云ふさて出給也
うれしくとこなふたてを書へてあん世をも導ひかれ契たる事
優婆塞ハ俗なから仏弟子に入人也比丘比丘尼優婆塞優
婆夷是を四部の弟子と云也当来導師をたのむ所を
守行てそれと云へはて御ちかふ事給むとも也
細　南無当来導師と云けるをきる人まく来生と契り

そくなさとや　於　深所也
一　ちつの物語　うへそくの行こなふ山の板の中なくそそもくしとこゝらおもねて
長生殿乃事の記そとめしハゆしきてちかひとかはしたんや八重
きく人のあはれ給へのせをとうね給ふ　茶　ゆしきさもいふうくしき
やも長生殿のうく楊貴妃乃羽をならへんといひしそれ
ともひろ記契るれハ家もそれに当るさへ弥勒乃出
世ともねく契らんとの事也
長恨歌　七月七日長生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥在
地願為連理枝と　細　玄宗乃比翼鳥連理枝也と契給し
ハつよくしてあさちる契也来生の弥勒をうけて契る
ことゝもや　紅　長天続とハいへとも変しられてゆくしかも
て三会の暁をと契ぬるへし
経くさしの法さとのめにもとちへし　於　ことふれ也

河 かやうにさためかたき也

されはこの世のちきりまてしくあはれさにゆくすゑをかねて契かけ給ふによ

花 夕顔哥 身のうさにや八夕顔の卑下也されとも行

末かねて八たのみかたしとの心にいへり 細 身のうさ乃ゆへ

なれはこそ来生まても八何の事のたのみあるへきそと也

くやしのちきりちかひともはからぬ心もとなくめり 花 前の世と

八十にあまる人との一説あり但楽乃久しくつゝましき前新哀

乃詞はうひ也と源氏のことくなしき心可然也

弄 行末をかねてたのめとのことはの詞とうちかへしく思給也

ここ一段又前乃いたくも物あはれくるしき人の体也

又可然也又心もとなく源氏乃ことをあはれある心也

細 源乃心中也此哥のうたも物あはれくるしき

人のさまもかたくなしくおほいひ給也

いさよふ月に 花 十六日乃月といへり是八十五夜のあくるなれ

月の入やらぬといさよふといふにや 花 いさよふ月に侍るひ

やすらひやすらふ心也十六日の月をいさよふ月といへるは八ちや

をそく出るによりて更けていひならはすにや是八十五夜の

明ての月也それをへたての月乃なこりやといひての

あくるまてへいさよふや

河 武士の八十うち川乃網代木にいさよふ浪のゆくゑしらすも

君やこん我やゆかんのいさよひに槙乃板戸もさゝすねにけり

かく語り此物語の山乃山にいさよふ雲八珠にや

山乃端にいさよふ月とをそへるをも待つ文に有り

これらにもやすらふ心也 細 十五夜乃月の入るは山の

にあくかれん心也

ゆくりなく 心なく也 不意ユクリナキ 日本紀 同 辛夺

ゆくりなくといふも同心也　河　不意の義ハはなれなんぬれなん無
ひやうもとうくや辛命をも心よりの心に叶ふ也
あくがれんことゝ女ハ云ひやすらひとかくの給ふほどにはか
に雲かくれて明ゆくそらいとをかし　私案　夕良乃心
に源の猶さそひ給とてかやうに頼む御心にゆかむるまゝを
かくやもやすらひ給様也
はしたなきほどにならぬさきにと例のいそぎ出給く
私案　御所をも明はなれぬさきに急ひ給ふ細何も急ぐ心をといへ
はしたなくしらぬさまによるの名也
かろらかにうちのせ給へれば右近ぞのりぬる
私案　夕良をも車にのせ給也右近も同車也
細　源乃ミつからうちのせ給ふ也
そのわたりちかきなにがしの院におはしましつきて

私案　河原院の事也これなにがしとかくす也常にいへる
なやうなることなとかくす也かふうしたるハ無名成へし又荒家に
つとしたる也　河　河原院也　六条坊門南万里小路東
なにがしの院とかきなしたるも彼院左大臣融（トヲルコウキヨ）公旧
宅又号二一条院一後に宇多院御所也云々　花略之
あづかりめしいづるほどあれたる門のしのぶ草しげりてみあ
げられたるたとしへなくこぐらし　河　法院に別当預也
つきくく　花略之
霧もふかく露けきに　弄　すだれをさへあげ給へれば
細　車のすだれを上給ふ也
まだされど行人あまた行て法袖をもいたくぬれにけるにありまさ
かやうなる事をならはざりつる心づくしなることにもあ
りけるかな　私　未らしはる古ぬきの袖に入て法袖ぬれる也

いふしつもかくやハ人のまことひあらむ我まつこ志らぬ恋のくめ見みち
源旁 恋の細よあくハ行つるをあれハ我まつこ志らぬと
いへりともそらひおつましきとの心也 細 ありかみそし
つまりこ志つ行ろらや見 かくやハ人のまことし志のあつまや
其意を明也
あつひ行つゝやそのほゝ女ちらつひく 恋く人まおひ給て
志のくめ見在のはしそまあつひ行ともの給ハちらつひて
山のもれ心をも志つてゆく月ハうきの宿ふてうきやうことあん
細 山の端ハ月をかくはへきあらと云てゆく月のうつろ也
山のうと源まうゝへいやゝ源の心をも志つてわつ分れきも
の宿ひ行うられて行まを也此次の恋うをねるを此人あれ
をゐとるく行ちさる此心あつしまゐへし 細 あの恋
のさ雨月の雲かくれそを残るをとるもたくあつゝぬ事

あや一葉細ま同
心ほうゑ出て拙状そうつしうちとをに思ひきれても穿ほし
深とゐるはゝゐのあつひあつんやもれけつうあはまを
むほそくとて拙状うつうすきにもきれハうれけしほとへうはよみ
のあつひあらんとおつしうおほをを 細 朱夕記の宿あそて人のとはし
はとひあるゝ心あつしひまおそ深しき思ふつと家し行てありう
しとや 細 せをれ而まゐすゝはきたつむあつひうと云給ふ也
がうそのあつゝ爾ま深きをと思ひさ志てうる人しまそふ給
をゐのや車にて乗あつゝて云給也
右近らんちうる心ちしあきしらうこれふとちるとも人まる給
云ひけてあるを 細 朱夕顔ハ路中抱のいひ入あるれ大嘗これを
そらまとも又余の宿まいふて又をを此懐の西白様をもつし
此思ひ心あるへし 艶 三やおも

あけくれ見んしるきはかなしあるとも見えしきに
某 なとこそされはそれなる也 細同之 ほまれ経営なとなく
めと云也又書積通字也
此法師としてなるをして我はめくし物見ゆる経よりなる経
なかりなどそのあれとこまきにき法しひなると
細 顕乃景教卜云ハ右近の法くハ性源氏のくまりて
もとも法光して云也
法とも人とも法めくハさるもあり 細 新乃卜羽也
あ見んさるいさの那也て 某 ひんなりとも也
むかまし御しとものく度あとはてまる物なりをも
是は年なるなく法の人きさやなとゆさ法達
細 下毛家司左大臣のとはなるなる也法く度なると
也 細 此顔ハ源氏乃流被官也
そめなり奏上乃法々也
事と法くに人くるしきかくれならもとめたるあり法くに心
ようにほうにもくにもとくるかくめさき行 細 源の羽也
法の極なると心を見くせそれとなるもはく法師なる也
うらわかは 細 其人ハ逸人あまきれハよしく法の物とも
まさるぬ事なる法たるほわは作見の川と契り経
事なるとほりのうちなし日くく我ほとに物さき行て
してうつる所事経よりとも見くあれて人のともなくある
くや見んのこ法まて 作見あの川と契り経
入鳥羽乃作見中河ハ云とぬともをなかくなるとつきめや八
或説作さ中河とハ名流也作見家川ともよめり汁(注八)横
川を御なるのあきとも本所乃河あ見常ハ云あるす
ありそれのあとく見すかぬる事つきめやてとりん
顕見先正説也 細同之 細 入鳥羽ハ息(イキ)あるき物なる数

に鳴るの御紀中也ハ清くゝるゝ也
木ふらぬとう也まうら物あるとたりきちつ紀草木ふ
と並ふ志らにんところなくみふ秋乃野らふくいまとも見
くさにいはるゝまゝそれそ
古と
宮ハ済まて人ハ古ふし宿ちつれや庭も籬も秋乃のゝある
ひともきらぬ也あふ成によある所乃郎　やそろしき也
疏（ケウ）隟（ゲキ）　氣（同）外
ゑらあゐられくゝふそ清くしるとして人もむゑらあれ也
あさてハそれまゝ浮るもきうとくもありにある法乃郎
此宗
列納ハあにたてたる座あり曹司（カウシ）人ハみふこのかくる
信くゝ清庭ふ人ハきき心也　細　列乃座也小寝殿ると云
物也雜舎也歟ハ此ふ座に在也
清りともおふあるとも有也とハ見ん師まゝてん也の路

此まてふく打りしきをハ見極る後へし
くれまちる我かくし侍へれと女乃いとに清ふし也思へれハなに
くそらるとふて居らてあらんと事れはさにてふひかりと散臨
して　此宗　くるときぬの袖あるとを霞（フクタ）雨にやるゝをやう又扇ある
と清して打さして半（ハンナン）面にかくしさる心ふや物あは心し
源氏乃顔かくし給をタ良乃清らしとあふ也　細　若き也
霞雨をそあまて面をとらくしてあるゝく事れ也也
夕霧に物をし也く花ハ我所これをよるとにかくしえにてそ絶
此宗
源乃方也物をもさへ也ハ源のかくし給へる清らかをとある
るし路ことをいへり夕良乃宿の花よるとにかくし縁あり
也也　細同之　心あそにそれとそてみる也ひとしくそとるまて
読路あり
清西乃花りやいへにとの路へもきうらのよ見んをさせく

夕㒵ハ行し時乃あとなるを思ひつゞく乃給へるや
えあるまじかりし極楽乃うハ清世ハたゞそれ時の定めなりけり
是ハ前の哥に心あてにそれかとぞ見る白露のひかりそへ
たる夕㒵乃花とよめる歌源氏をえありと見しより
ともろともにつくしける宿ありしを思ひ出たまふやうに常に
人をさへ恨むるまでやすくハ夕㒵の事ハいとしのび
つゝみにきこえてかくいふやうなる事のあるとて小露の光
つましやのふとかはれたるにあはれかちにはかなく失せしなる
を女乃かくれしもさくなひたまふらむといひて
人をも見しも定め成たりし也物怪の紀行する事也　[翠扇]
と出ける時の事を今ハたゞ一つの煙とあはれハ
夕㒵のたよりにまちて行ハ空も物の哀れなり
をきそ物怪めきたる事也又と案あり次乃詞にまた

行さきを行べきは世にあつくるを行る詞をとみるに[注]
後に知り侍りのちも細扇を出し時ハかやうにうちをを
てある人さへとく八思ひさるべしとも思ひ奉る事大方
なる雲やその心あてにそれかとぞ見るの事をうかべし
八月十七日乃更に定めまてなお陣してまゐる
御人しく又覚来の詞にてこれハその哥かえり時また見
し景物の数あまたもちがへそ今なあくまで行法なる
たのもしくひたすら乃心あるべし
世はのたよりにおりしとなほしあはれさをうらなさを行るさ
まうたにあくまでとこそうてう　[抄云]　是ハ夕㒵乃心也此所もち
あくまでも家る源氏をとえさへたまひも思ひめぐる心乃ぬた
るとそ乃哥八行しるたよりそをしひし物の怪を添へめお
ることありや物怪めく事あるべし

まいてゆしきまて見んと捨よ　ましてやゆしき心
と捨へし也云々
はきかへ尾へて行つゝはるゝさにおもくハ侍し也さひつ物
をゆくへなき物のうし行へいとむくつましの故なく
柏宗 源氏乃鞆也夕顔のはかなく隠心しけはかに知を法氏
をおもくも侍し也さひし物をとさまとてハ見くしたかり
尾ハもやはかの乗行へとも也むくつましやハ侍そらしとそ
生宿まちて御くし行やとの心なりや　細　はかなき我ハあら
も爾ても出る人をあのうし行へと也
あまのこちれも也乃てはれのうらうをそぬさ夜
白波乃よるはる法しせとはくに海士の子なれハ宿も定めん
宿をも法へさらぬ男子てハいかのあのしんとの心なりや
いとおもひられ候なり　宗　あまへたる心也　肖細　柏同之

よし是も家くつ家もつ也恨のいけかけくもひくらし行
海士乃かる藻にすむ虫我からと絶を立てあるかなせを云へり
花 はかなのこと也女乃身はつらさて藻にすむ虫をとかりよを
て都方の人にはあはねとも心乗はてぬ色もなくとりかはと
うしなひ又くるしぬとや　細　家不可得ありとある
あまの子と云也くるまに我らくの細好也
我身くはかな結ひ乃風ふくにとの結花
惟光は訪ぬ人の法しくて紬ちるとさいくまて　宗　右近より
惟光か法にく袖をいとんか中て法くる袖まいるかな
右近かいとん事法はいふいとわしまれもちくとえはて
ひとつくまて　柏宗　惟光か夕顔をとふやうにとあはれより
也我との人とも右近かわたかひかなきむしてのよりし
まれもえちら人のあとの心也

かくかへてきこえとおりさ給ふをかうしうちとけぬへきさま
き夜よりそへ也としたる新也　宗 寝覚まして夕顔坂
よ源氏乃ききたる給ハ夕顔の所々をさそてとをしたまう
新也　孔 源のかく語るまつまさて夕顔のくもりたまう
いを惟光をもしちかる也　かくしう　細 惟光か記也
わろひとなくさひなるきぬへかりしかとこそゆうつきさそて心ひ
ろさよちなとめさまのりそてさひをる
よろと宗内之所たろてしあれもさひうつへきことな　孔宗 惟光えて新
わと源氏よゆつりさるる我んひろうさひしう
ぬとのまへ給也
ならそへなく　宗 源乃心也なとゑんかつさちなし也
細 なふるしの流乃所さこひ侍るへし
まいりなるゝ夕乃ろうさとなりめ行てわくまゝにはゝぐくぬる

おほしきたまひをなかひされたりのもとられをはなてそひ
うし給へ乃極ふちへと見かりて女との前よ所をを云
乃候へふおやしき心ちハしおもゆる人乃おもけさきれ
まてもとそしうらうをゆくきしれいと給へそうしほと行
ろさいろ氏ろひろうてもものとひと知るてよさひなる
さ源へうき心なるし　ほと　集 日本紀
かうしとくわろし行て知ほとおかるる裏くるとてあつかる
を聴よ在る清浄所よりく　孔宗 源氏清心欲とも云給
とも源乃我ハおもうしわをも往んの在まさて在なる
也恨給也
あ給んのうら乃在てるその心給くるおんほそ紀と恨給ふ
宗夕顔乃陽心(キヤウシン)乃心給とも也
うちにゆくふまとめさるを行りんをといかくに宮河ねるんとし

おかしやかにて御まへに侍申しれならんや　抄大内ニ源氏

と為よしさまえんやとや　細同之

六条わたりとみとめたにもひそかにおはしますところさま

ひとふるしうらにとかることありしと

と思召出さるゝ所にてもらんかし霊とも脚緒やいさく　抄宗　清息所乃清る

くのたまふをもともむる能とや

いとをしきもらんむ御思ひ申給　細　六条清息所乃事也

ちかふ心をもちかはれしいかひと伺ふれと物語にてあるに

此夕顔の巻に物怪の事をかたるや清息所のうちとなさ

ありしとゆつるへきれと源の思ふへき給や如く之給

さよふなとなて霊と通もとらうや

あまり心あるつみの人をもつゝしむ清息を後をおもてとも

つまなくてたやかと物ものへられ給なるへく後給

にもこし給つかたに清搓をにいとおかしきわろき女めて

とのかいとゆえてたゝしきをもなる給を為物なれさて

抄　清息所乃事也源氏の物ひろく人給あるにまるて

邪気にあつまるかや

かくあとあるにしちまれ人をあつておかしきをもなゆかし給に

こそいとめさましくいはうれとて

乃むすめやめてたゝしと思ひよとも為給ひて侍なる　抄宗　又息をに三位

人あくとあるれをとゝめてふうしやゝ大切也

細　ちるかの性乃けしとちまれをおもとあるにしちまれとハらへり

又清息所のあるましき契とさまくにいひあらはしかめ

いくほともなくけしをあれ人にもひふう給となる

と給ふく六給段へし

清るさかるの人をとゝれをあさきんやをもとみえ給ふなるのはなはた

ちかうめしてまとろみ給へるまにはまくらかみにいとをかしけなる女ゐて
させておもほさるれもたちをおきさぬさてうちとき給ひて
右近をおもわくし給ふこれをみそらしとおもひ給へくるしく
まへしつ給はん　源物語乃人　細　夕顔也
わさなるをかの人おもひしてまたくらしあまりしられ給へるを
との給へし　細　源乃右近まての給也
いかてかこのまゝらうしてまいらん人も　細　右近か詞也
何かわかくしまうちつゝみ給ひてまいれとのたまへは人は山
賤このまゝそふ...にとうやまし人はえまいらてまかりぬ
す　宗　鬼乃形魔性の事也
右
山ひとのとはまことそ今はさはるさう人とみせすゝむ世に
ゐ女見ゆるかたち...わたりてきこえかひていたはしたまへとなり
細　夕顔上なり

あさましくなりてこれはかのもしきさたり　弄　云さたり
物乃気まさしく給也　伊勢物語ニ哀
も笠もとりあへすしとゝにぬれてまとひ来にけり
秋萩ににほふにぬれてまとふこそ...の山道にまよひ給也
物の怪をなんまうさるくせさを給ふ本よりくらくにゆひさ
むくにりや右近を見ゆ也　弄　右近か詞也　以下物のけよ
りまもおとされ給ひてかくれあらき所との心を思ひて法
物性とにへやや　細　平生物の怪とし給也と云ことや也
いと物ようて心をもまとのそみける物と　宗　源氏詞也
魔老乃霊と見ゆるは死相乃一也　細　河ヲ魔老の霊と見
猶は死相乃一なりやまくいくとと夕顔上魔老ヲしてある
もと物の怪乃物とひきとてありしをと源の心給也
いとをしきを...して家人をおこさむとするを山...

このおもて御はいとう君さしもてに来りしちかくらて太子のよ頂
うを待て御つの御前とにさてしきなをとしおかせ給へれとやさ
との御をとさしにしうり風もくしう御あたりなるに人ハすく
なくて侍かく機りなるとハみな御待より　いとをし　河　海
この院乃あいろの子むつましうはへひのよ　細　と相付よ
らひきろ物とも也　此院乃預の子むつましハ家の大いとのゝ
を見てうしるをはうふてつかうまつりもとらへしもの也
わうさ御の又つゝともはもひとつなり　孟　度上童也
へ度上来つら善とをいみな　細　河説ハ随男子ならハた
随人きなり
是ハのちとハまんもくるしそて有な　弄　夕白乃宿へまし
めてらき給へりつれさるなり　細　夕顔の花をそ来りし
随身なり

めをハ消きてくへしておれされハきらくくちしあそられきとハ尤
むとはゝうらして縁をてきゝ行く出と如せよ
如何なきよハ　中つ布よ沙也
人をれ出るる侍よ心をそていぬる物りこれきの朝名乃さ
見ゆらんとやとてきを給へハ侍のひはまとを如何せをとなとを
なり待月に満む人まなへきうしやてあんなりて侍
ぬる也もの也　さりひつれと仕ゝをまなり　孤　顔の子のみ題
このちやゝをそをくらあらりかれを　孤　同あいやうと女子
尤　禁中みく隠口の宿出中十人女人武家よりさところ
郎やを院かてハ武者所と言也　弄　蔵人ま投官あり
その世に貴有るとの拝かへハこれとたりをゆる也
ゆうる　万おつさらまるとみの京にやくるるもる天りゆるの
見くんやと如きかな

いとはなくしきうちあらして　栄　弓はるちらくしき
あらは四也
只あやうしやうおくありけるとうけらしろうくいぬるあり
誰何只行　史記　只危彼誰　本朝文粋
うちとけはしゐりて名をいはんとおもひぬらんとおもひうち
ろとのゐ申は夜ておこなふとするを御いまだいはれずうちおもとぬ
にこそは　栄　禁中なにく宿直申しの亥の一刻をとりて
行ふしやる名対面をとすとてそれをするを名対面とはいふ也さ
て其後ぬ滝口にうつるは也只今宿ぬ滝口の名乗をとり
終て内の事をしたるを聞くまうさいでうて又ぬまうそ
此也亥刻するれをめのあるの始也　考　亥一刻ぬ内豎所の召
を奏して其後殿上の名対面ありて名対面とは名謁とい
ふ殿上の侍宿直せる侍臣を名あとよばれて名乗りする也此

次ぬ滝口乃宿直申あり是の為中也されは名謁と申せ
こそや滝口ハ必ずある物也いはれと亥の刻乃にまるれハさ
そとも又ぬまうそいでそちまるを　細　滝口乃とのゐ申
まうしたり亥乃刻なくなるらんやと孫也
めうりしてさくろ後人をも女房ハ滝口ならいつつて左之ハ聞き
あらにいふ　細　是をいまさせ出たをまちぬあ
まうつる時の名也
あらなそ行おほひるをししぬ宇の心ちやあれたる夜ハさこそ
あとやうのとしくへともやうらんとてをもおうつらねもれ
みらん　栄　右をとに対して源氏の何かる哉也
まろかまへをさやうの事ゆかねを拙とき孫しとてを
此ここ子みつくまうしていを八聞と何まって也
聞かれくし得るに　栄　右をとをひきれて候也

いとうつくしうこゝちのあはれなれハうれしくて行や

栄 右をとく詞也

わかまへにまうでつるをわかはさゝりあやしきと

旅 夕顔のうゑと右をとく也

そうれとなうハやうてくいはるゝを行ふうれをせ給ふさうにこそ

行てとなふくとしてあされみをあくぬたまえれハ得やうさ

うちひらうんへみそく物ゆをとうしまぬるあめりやときむくふ

きゆちし行 うよろをとうハ 旅 源氏詞也

さうくまてさられり 栄 前よ云やくたうしてさられやな

道なる也

右をとをうて為に光をみをあくねも 旅栄 云やくと

つまみたえたるまし花様也

ちゝき詞光様とありさーなをてあはれてよられとのまふ道ハあ

らぬをとみくわかまへちゝくをえんえしぬはしましさたに

あとゝまてよられ 栄 源氏乃詞也 細 源口源をと思

まてきみまいしたる校よ除まてよられとハ給しるゝ也

あもしみをえへのやうしれるをもまてうやむうろにたてゝうひ

和ケそとてめくらもそて見ん給へもたくこの花うしに詩々にえ

えうるやらうしるる女の面うもたに見んとそてあふとこさこゝうをぬ

あけしみをえのやうしさて 旅 未在乃らうや

むしし物語るをにてそう源氏てハさをやいとめつゝうたにも

をつきをたれをもみけこのへやうに成めるうをおもふれ心さえ

こさに 旅栄 寛平法皇の河原院よ法皇乃时融公霊来

て法見不をとはまうをとむとまる时よ汝ハ官家たり

我ハ天下のうちをとの給へ大法皇へなるとわり

おのくへとたゝて道行ハにそひまてやむ御をろうし行給

さくまうえにひしめきつてつにつゞきにてそれにあはれとあられかし
たちのし　細　ことさらと恐怖(オソロシク)あれとゝと親身のうへとゝとゝし
ておもて此世見のこととつゝふを也をほうと也
ことのまいらせにとつひとる患給へきくうする　笑　惟元さん
あるとはらぬ也
ほうしるなとしてそはく海すのことのましき物よを知ほとを
あたれと　此条　草の寛平は皇乃法皇不ちやまし給時
こと浄蔵大法師加持し行て蘇生(ソセイ)し給とや
又そはうるを行へと　笑　心よりくをあらしやとの紀也
わらさ法ゆちかくいふひをくありぬるど刀へ給にや除さ
あうてはといふさそてはつ見つき出給へいとゆ刀つきめるん
ぞ給ひつやの給へやをし入るそれた　あつ見　わつさうん
也云詞也ありとわるをといふ同　細うほく詞也

まうひ物うやく沙行　笑　此世の人もちやかく給ひけるも也
行　人の死すれはみ三魂魄乃二つあり三魂は肉とゝもに魂天へ
人乃死也又陰靈散(シンリサン)をとれ又[illegible]とる月陰生乃魂なりと
七魄は屍(シカバネ)をとてもろ天靈鬼(キ)神(シン)乃ふとし五六日もたるとなも
のみくれ神(ミシ)通(ツウ)ありし是無(ム)想(サウ)法(ホツ)身(シン)と身也十三年に本(ホン)元
に帰(キ)するも十三年まてハ屍まそ知て居るもされて魂
さるを魂とてま成はかにるそつしき家に紙乃るを物
ほそつしそちる也　細同之
たくとかうしはかむちつしやこひある[illegible]ちめて[illegible]
らよいとやうし
せをそてたる也　細　古道を親身乃ほそろうて忠心とう
東度のわらちすみて北をとおひやしあるたあしを地は
しつて身心は[illegible]くちるともいふてにあつてそ行つ

河
世継云此度貞信公也いはれの法師とこそ奏し給へは之未
延喜朱雀院乃御時也それハ御きとめ宣旨うけ給ハりて
て参りておこなひに陣の座ざまにおハしますに南殿
乃御帳のうしろの程をとほらせ給ふに物のけはひして太
刀の石突をとらへたりけれハいとあやしくてさく
らせ給ふに毛ハむくむくと生たる手の爪なかく刀の刃のや
うなるに鬼也けりといとおそろしく思しけれと臆
したる様ハ見えしと念せさせ給ひておほやけの勅宣
承りて定めに参る人とらふるは何物そゆるさすハあし
かりなんとて御太刀を引ぬきてかれか手をとらへさせ給へ
けれハまとひてうちはなちてこそ丑寅のすみさま
にまかりにけれ　大鏡　細同之
まろの君ハ御とりかくしあそハぬとハいさめ給ていと深きた、

しきたはられまる此らし給へ　案　右近のかれたるとかきの
給へる也
このおとことかくてあるにいと故中宮物にはそたち入る人
あるやうしそらるとそらいよ惟光の朝臣のやと給る所にま
かとていそにありくすまし　いとおほせよ
このおとこ　案　あいかはともれたる也　細　解也
あたりの右きるそこに物まさる程とあつてあるくにはうへき
うしとのひくいく　あたりの右きう　於惟光か兄也　細　弟也
かの右きるえるとのきむしにおとろくしくいひおかる所あり
きゆるさぬ人おりたまと　あるま君　細　大弐乃めのと也
のおやうまれとむにハかへるとて此ひとともしるしたる
身まくん事いとしくそおほ給てにろくく　細　ゐやうにあ
おくさやうに物の給ともされと心そられくうにみゆるとも也

おほかたのむく〳〵しさたとへんかたなく夜中もすきにけん
かし風のやゝあらゝかに吹たるはまして松のひゝき木ふかく
きこえて　むく〳〵しさ　孟　物おそろしきさま也　河　いつく
物そ疎しきさ也
けしきある鳥のからこゑになけるも　花　ふくろふなるへし
ふくろふといふ也　からこゑといへる也
ふくろふはこれにやとおほゆ　おもひめくらせはこゝかしこの
とをくうとましきに人こゑせす　孟　梟鳴松桂枝狐蔵蘭
菊叢蒼苔黄葉地日暮多風　白氏文集凶宅詩
弄　山寺むくつけくろふをこれにやと　河内本にあり　面白
人こゑはせすと　細　河原院の有さま思ひやるへし
なとてかくはかなき宿りはとりつるそとくやしさもや
らんかたなし　細　此院は庭とりとりしる也

右近は物もおほえす君につとそひたてまつりてわなゝきしぬ
へし　志ぬらんとも也
又これもいかならんと心そらにてとらへ給へり我ひと
りさかしき人にておほしやるかたそなきや　花　右近をとらへあ
一　らんやとまとひ給へる也
火はほのかにまたゝきて　河　灯のすこしにほひかゝるを
人のめのまたゝくに似たるといふ
もやのきはにたてたる屏風のかみこゝかしこのくま〳〵し
くおほえ給に物のあしおとひし〳〵とふみならしつゝうしろ
よりくる心ちす　細　人の夜はされも物のかくれてみゆる
なる心も物おそろしき也思へはさなくてもさる心也
惟光とくまいらなんとおほせとありかさためぬものにてこゝ
かしこたつねけるほとに　細　惟光を待給ふ心也

此の御ほとの御さまくちをしくかへすかへす心ちし給
うらうしなふるかたきもあるまじきゆへに
引哥
空やなき八千代ともとまり御心地してまつりしとにえし給ひ
命とりもてなしの恋しくなり給ふめと見るもん我もいかにをくれなう
私案
形やうなうかりしさしにあるのことを変々にくく命とも身なう
らへ給ふる心ちし給ふ也
うち成ちらに御ほとをとるまくみなまし死こころの心ちくひとまかてて
まし うゆくさきの空うしや成ぬへきことを身をわかめり
一 私 夜半はまた心とりも給ての浩野かやとおほしけしてたる也
悪ふとも世にはうるのかくれまくなめ　私 源のかたりける
あり天地有ける都や可有也
内よりうしめさせんとうしめてへの御ひいそん成すまう
めつらしき人のなからも世さひはるる事へき事ふめりあるくて

おとりかりしきゆへ成さるへきさら那とおほしめくらしたまふ
してもれみ川乃朝臣まうれかり　細 内よりの宣んとえしめと
して天下にかくれあるまじきとも也
御中暁といふは法心まをてくるものくちよりひしともいうて
あかうしにおへおとなくうつるとみくしや御あはれにおもしめし
いまその後ひいそん事のあへうすれたり御とおもいれたまふ
たれ　細 とはしも惟光をも参らるからん也
右近といふの御ならひきくにまうしめくるもとうちおもいそ
まてなくとえもえきを行って我ひとるもいうしるといふ
きまちなつりなかに　私案 惟光かさいるきとらひとをと
くさうて乃心也　細 そしめハ惟光か我あなたうし人のなかに
してありきしもとも思ふ也
此人まつきとの色御あてくれしきるのとおほされなるも

ちるをいとくちをしと心をとめたるにや　花　あまりに
はかなきよのなかはつくらはしとおもふをやかて心
とゞむまじきにはあらねどいふ心也　杜子美か詩
定知栽識深とはくまなる此也　細　杜子美か詩にも真
やさしさひあはれにいとおもしろきのあるをはなさし
きいかにもあはれなるありさまのなるかな
やらん　　弄　御事
もろもろをとてそいはゆるれとてそのうへにせさせたまふる
をたてまつりてはなさるものせさせひやうとのはな
まもろもろと　　孔　寺なる人行幸のこともいひはなしにとそ
そのよの人まうるものかたりに来り　　孔　宗　宴に首尾のこと
くなをちかひなる様也　細　物ちかひくのもれ毎なり
みはかせ世間の事ともなし

またいとめつらしきなるをと待られ　細　惟光か詞也
なくくはおもひはらの物せさせを行事やなりなん
　細　夕顔上八月経達例なとやしきのあるほとなり也
なるるとはなとていはせなさいとおもしなたら
うちとくのなまるへといふなりて　なりなるもなる
けり　細　源氏詞也
なのれともうなとさぬ
　思はなれてもうなくとかよくこそはめいくをとも
さんへともしらぬひ　　宋　なるまいとしてもにいと云詞乃
心也惟光八夫なる右近と同様なや　細　惟光の
ゑりてちらしつき行やうなれとも見とも又いひまつ年
ともなぬものなれたる也
世中よりはなるともよひしきぬる人そそまなくわすへ八

そのもとよりはいつまてもかくはなちやりてはいかゝなる
なとされと　あはれしく　あはれなる心地もはなれかたかるへき也
この院まかるとにこゝかしこ心をハいとまなかるへし
孔 是まても惟光か詞
此人ゝ思ふにそむなしとおもしめとのこゝ物いひも
らしかへき　此人ひとかも　孔 院まうちるまてこそと云心也
くらんうちをよちまうしつとめしん　春属きんそく
も読へし
まつ此院をといそわりしまうしねといふ　栄 惟光か詞也
孔也 細 此院あつかりてもかくしあまりい出給へとや也
扌てこれよりも人さくなたる所ハひてうあしんとの給
細 源乃詞
もに扌て給ふん　孔栄 源氏乃人さくなる所と給ふて

とうまそのたにて此所あると合点し　孔栄　惟光か詞也
此乃あまりさとハ女房たちとのかれしひとまそへりちなかて
給ひんまとあかりきゝけくそうむかうにてもんほくら給ひんうり
とのつくいうし給ひんを　此あたりさと　細 なにかしの院也
山てらにてそ行ゝやまのものとつくる所ありして物事也
あまり事給ひんや　孔 山寺なとハかゝやうれなる蔵き物也
点ひまりし申　細 思案して也
むなしく尼けへし女房乃ことにてて尼ならぬく所ありんうし
山乃をんまてはしまらん惟光か所ちて此朝臣のかれとうり
給しとのかもとゝ所あまりの所へ人もけふやくとに給れと
若見給へし　細 惟光かみれとも也　ことにそうて
栄 年よりとて膝をまりたる様也一説年よりあれ
も膝をまりて背をまりて二の膝をとるといそさる

中に伴ましきなくて車の輪とゞめてはれらゝなくやすき
年老れハ我五髪を白川乃いゝとなむ申て成よし有かな
いとうき世に住わびぬるを申てかきたれて泪とのうちさしに
御車いれ　抄　くらく申つる也云心也　細同　河　四圍と
といふ事の心也家見をとらむ物を也
公人などとえいて紀行申しきれと　抄　夕白なと源氏へえいる
まる給りけも惟光か御車にのせなまる也
うきむしろなどとして惟光のきなまり　弄　家公の
やかの遊ひや一番ちうえ人など遊ふくはゞて加へ
つきなど云也とく　河三　御前之可留
いとさゝやかなるとかのしゝ帯をちすくらうをもあり
伴やゝ　細　ちへきえ也
三てうかしとえとねむ　抄　おもしまくきえおいかぬ也

出ゝ合も此使逢出さるをもめるれさもとゞひく阿かきましかうこの
あしとさ打わたもえあり　細　うへ遊又津をさたるさ随也
ありさきえん清きと見んとて招随でとちや浩馬みく二条
院へおりしさきあん人清きもうの成彼くぬ随とにとて
細　浩車みとさてひ菜く浩出おりたく云給也
右近もとえへくのもとれも　抄　夕顔乃ゐる庭又案也
もちゝるまむさ舞をなまりてくてまてひきこあまさちるとして
くらつよのるき　惟光か清き也ろゝるさいさろ庭れ清くちるへ
細　我ゐるとも源又なまる也　案　ちゝ庭の様ちるへし
左りさいとおやしく招随くぬとゝゝるもちなれと清くし我の
ゆくしきいと見んまれもあるとしてゐ行ま　案　惟光か思
ひゝともかきとぬんてとみう
是ハまのもと招随え行かに我ゝの清くみくおりしつきたり

人くのいくよるを折りしまへはよろしきやまうしきに見くしさとを
頭中将と人々と清少納言のうちに入給ひくむしとてとなさへ宮にも
たにいとめでたくきれもるとてのさまうちくへつるはかなれはけん
いかにかるうきらんとかいふれ宮よりちきん見えさてゆかし
あはれにあるやはしくや思らんと心さちひとりちかてを
頭中将けは清むしとちれあく源氏うちし給ひて清少納言しと
いとく力もあつききらう地しつていとろうしをくさもまれ給
ふるもかくたう御くてきれともいふうつくに成ぬらふあり也とみ
はさて　ゆきさあはれなるを　とられはきり也
月さえくきれとも地にあるを給ひてもくへく侍りしうるを
て清少納言とそくのうしき宮也とく間しちてふとさう給
ほうく物語清うてに内よりを清はうひありきの御こゑさきて
いてましくさうへしまう物かたりのふかうくもを給ふ　清少納言

注　ある人なと早朝よは清少納言御粥よりの御ともしいたすのうしへはさく
めさいくるをさきに也
太后の宮まてはいるを給ひへと頭中将もろきとをさうちかへくしくれ
たまはりの給へやその給ひてみるものうちかへくしの給ふ　注宋
よりの宮まて内まて也　乃清少納言よりまうり給へうるされもる
頭中将ちるきに見えもせぬうちなりくる給しるまゝ也
めのやうくはうかまのくはえ尽のくるをひよりわきくまうくひ
侍しうかくていうとりむかとうけるとしてそのきるすしうやよ
見んうきうきりしをはくろ又ねうてうへくるんきりうさ
源今一うへひとうくひ見んすとやたうりしをはいときうさすれかう
うかさひしめのとさうきちにほししとやおまうんやとうふ
給へくてうわりしに　注　源氏乃頭中将よ給ふうて詞也
天うあまりあるきたと人のやまひしきあら織まえん出あへて

あまたあるとにあるを　細　此纖氣（エ）ともまたうしにかくの理也
おちうくゝるとて日を過して命んとらふて侍るを纖さく津を侍し
久る　孫　案やむ時家の中を出へさを備て死され八出らは何か嫌ふると
忘らにたとくゝるを母日暮て死御しゆるを源氏さこしめしつ
過るるさくゝら八迫へ来り行給はぬとも　細　これ孫をさそく申しこと也
神事あるけ八いと不忌んするさもとくおほす給へりしこまかに
てらん見よぬなり　花　夕顔上うを給ふ八月十六日九月
あり九月八日の月ゆく一日よりも清祓事也三十日乃
孫（タゝル）よりあまた給ふゆへて来月叶まし給とや
此あまりさするを忌ひさをやさうや給へんうしらいとゝくて
くるしきを給れむ　案　咳病（シハフキ）　咳病（カイ）　咳嗽（カイソウ）
いとむしういふく常ゆるるあをの給　孫　云れや　みをけち
給くくさこゆゐこと云也　細　此中ゐよ含へ給也

中ゐ侍へはさるよしをそへろしゆかしめたる人と清めまひ
にいさくもとめむやうしを行て清めしさあそう侍るをゆめし
給て　細　中ゐ乃詞也
為ちらくへり　孫　案　此中ゐ乃へ給ふゆへこたち出へりて中侍るを極也
ゆかれ為けるさあれよくらを行るや　孫　行かれや何やらし
あつをとりわき事に（ミト）行おひたまのうちやとや
のたやくを給ふとてさるとも思ふ給へつねよらうた
（孫）事よあるをのさて云事心也　細　陸し行や
むさつかれ行て　細　此中ゐのうつりきにの給と心のあへ
ありつかりしをいふ給也
かくて後うあへかくてそてやほしぬきうくひよかれたるとは
をとろし行人　細　為やうにこ後うにゐくゐも為方に此中ゐを
中されしとや　孫　源氏

いとくるしくしをゆかれと　断　きの心也
はれなくの給へと心のうちにはいひなくかなしきこと
おほさに清きちとなるやましきれは人はめも見んはかなきを
給らん　栄　雨つれなふにきこしとなくらんこと也
蔵人の弁をめしてまめやかにかくやうのとこうでさ給
給ふ大殿なとにもかゝる給ふ有てえ参らぬ消せうこ
なとゆへの給ふ　頭宗　頭中将にはなれは此觸穢し給へと
らは給ゑ出て蔵人弁して懇に奏し給へと也　頭中将
の御服の事也　細同
白書てられみはまはれりて家をうくひあるまとの給て来る人
くをみなたちなくしいはなつれも人きをうしはめしうきて
ゆかそととを見んとてはやとの給ふやうくに袖くと消ゆるに
とまおてこゆるかれの子　白書て　栄　十七日の暁也

惟光をなくらは海はうまきにをて八まのし給ゆれ
頭中将にくましきを八清きをるもを云ひつれをもるや清
よ服給との心也　細　惟光申也
なくとなきさ伊しんも忍んなれとおほとなん日よりく
伊れはとくの事はとさうれ便のあひきりて伊まよひ
あしひつきを伊りぬるを申す由
なり　細　もて並をとさてもいとさて　頭宗　忌中なれとも惟光か申
明日葬送まで也
ことうしをや也
そひすらはるは女はいたとの給へも　栄　君とはいてせ心給也
うきなん又えいてしまう給めるなとも又くれしとてをとひ給
てあさは君みをおちへぬと見給へはる　頭　君とうれさ
のあまりに君よ身もとなけてうきをなんとのける心也
世中此うちひとしに身もとなまをは深に君てこそ深なりなきあ

葉おくる遠山の庵　拾遺集にあり彼人の
細 身となきんやうらみしと也河海ニ遠山の庵拾遺集ニ有
にあり彼心ハこしかたハ霊山ちかき乃事なりへきれハ而とも
猶ちかくさしも有ぬへし又待つてもふかき庵にて浅なり
なめともはるかハ庵ふかくもやうなる眺望面白や
　遠山庵の煙のまくれたくもつれくゆへし歌ともなん
かの為る待ともしつはまきやしんしたまてとまちつらひ志はめてさ
とのさ夜のひめこもりして也あんらしらへと花待つるとかさ
まゆゆるまくにいとゆかんしも打侍して　孤栄　右とさの夕
　影の宿人めけと若やしんと也
あといひと心ちるやまうしつれ面白花つるとあん打侍ゆる
との給ふ　我とハ　細　源也
あにうたしに打まかり打とさせ給　細　惟光なる也
待る人きみさてよろ河乃ことなしめ人なとまして也ちな給
まいらせ　孤栄　待とてさのとみえうやうに歌行りん先世乃む
くひみしても打侍しめしなもとと惟光なる也　細　不画
とこゆるとちんまる事みて有へきやとなく待めてなき也
惟光打るとたちてよ絵つまを打し給なとや　孤栄　人すみ
みとにつきてともきうもし也也
待りし　孤　待つみくハ忘れとと云心也　細　源乃羽
さみなのひなも也　細　定まる也としハこのひなをととと也也
うつひそゝる心乃もとさしひは　栄　一たん乃難とも当我待つそ
ともこ云心ともあり　河　荒　毛詩　廾同　荒淫同
人とつてつにさしはるかととひぬへきうしとかしたなり
　栄　うしかんわりんうかしさきなき也
かおの命婦るとにもこうけなけし見ましてうやう乃事

なとかうさめらるゝと心つよくおほしなせと御ゆへにこそやはうとめ給
よ　かねの命婦　孔宗　惟光か夫婦也　細　いまうや也
たゝぬは給はりしさとみえ　孔　惟光か祖也　是ハ東山の寺にて法
師となりたる人也　たゝぬハ何なるとしよりぬる乃心也
なとなる法はひなれとや也　此寺ハ東山霊山(リヤウセン)にてよ
や　細　さなしぬや此寺とたしやてハうれたぬ僧なとう
ともしく出したる也ましてそおほハそれかいへこそ也
皆かひなきはたゝしと給はりと覚ゆるにう　宗　異(コト)也　ほう
ぬたしにかひなき也
かゝる給へる　孫宗　惟光かよくはむとさしめして法師の
あつさむともんとうるを給をいひる也　それよう承心ゆや
ほのきく女房なとおやしきを給ひなんきうしひのよしの
給ひてうちふと来り給ハ又かく給ゆかなをきこまし

ほのくおやしき所　女房　細　二条院よ候(コウ)する女房也
たゝはしとおくまれでとその給とつさきその給へと　宗足
ハ夕顔乃葬(サウ)送(ソウ)とそ給ゝみえなきやう給んや　惟光
か法師の心にたとくしなもへきよ仰しれとて法師を
立やあるへきやうにやよやの法心也　細　ことなくなる也
されやなく沙汰(サタ)てよとも葬(サウ)送(ソウ)とちとるとはくろ
ひくさるる人を沙汰せよかしも
なにかさとくしなきへきやとゆくれとてさいつ
細　惟光か法師とよる事を立てや細也心さままてとて面白
いとあれを御給はるれハ　宗　源乃心也　とえ定ゆる法調也
御んなりゆとそ人もれと　細　惟光か心とさとゆてかし憚(ハカリ)なくう
の給也
今一たひかのなきからを見んかいといふせかるへきを馬よ

てものせんとの給ふを　いつきれ　宋人もとる也
いとたいたいしき事とハ思へとさおほされんハいかゝせんや
はやいてましてよふけぬさきにかへらせおはしませと
申せは　かくいくしき　花　家かくてる不可叶との心詞を
随身とも　細　惟光か詞也
このころの御やつれに　細　此夕顔の家へかよひ給ふ時のやつされ
狩装束也
まうけ給へる　花　用意し給ふ也
御心ちかきくらしいみしくたへかたけれはかく
あやしきみちにいてたちても
あやうかりし物こりにいかにせんとおほしわつらへと
なをかなしさのやるかたなく　はやうの御すまひ
に夕顔の骸を見給はんとて東山への道に　花　宋　河原院

出給ふともおもひやりきれハいつの世にかと思へとまも
ありしかたちをも見んとおほしねんして
例の大夫随身を具して　細　惟光も随身も供奉の物也
道遠くおほゆ　花　大夫ハ惟光也
此ハ不明のつまれハ随身とハ云う　細　惟光と又随身也
十七日の月さし出て河原のほと御さきの火もほのかなるに
花　十七日の月まちれ日ともしむ家またとふくハ十七日也
鳥辺野のかたなと見やりたるほとなとものむつかしきもなにとも
おほえ給はすかきみたる心ちしておはしつきぬあたり
さへすこきにいたやのかたはらにたうたてゝおこなへる
拾遺　鳥辺山谷に煙のもえたゝははかなく見えし我としらなむ
細　鳥辺野のあたりはうち煙たえす年中れんあるなれは物
むつかしくへきとおもての法もうはかたなく給ハぬと也

あらぬのほまれにも哀なりけんあはれもおもひはかりにもなしてなん
也　花にかくしある惟光か父のめのとの尼也
その尼の子女なともあるへしそのつゝんて法師なと
二三人物語しけり　孫　死人をとりたる所には書を読すと也
わさとのつゝまやかぬ念仏するを所　花　道心ある人の女房の念
仏の唱はしめとも也
寺とのそやとみれはともしひとていとしめやかなり
法事の物也
ともしみ火のかけに見ゆるはほのかに人のおもかけもそひかりの
見えあれ　十七日の月の法会や
この尼のこゑのたゝる大とこのこゑそらにて経をよみたる
にあはれのさまするはほのかにもつれて見えとなるをまて
うらんは屏風をへたてゝそはにあるやうかれとに見え給ふ

大とこ　孫　大徳　日本紀　ほうしとよめり
おそろしき事もおほしてわらはすをかるる法衣してよき
さかなるましきやうにおもひけりとたく人あらはにや今一たひ
色をもたにゆきを候へりつるむかしの姿をにかなきをきゝん
孫　夕顔のさま也
志りつるほとに心をはくして哀にかほをしとうちなきてあ
さらしゆうへし死にをいそきとりもれしまほになくに事
何なし　志りしのかと　孫　独りあはれとのみ也
大とこたちも多かれと声にくゝおもしやとふひてみなかなし
たかきしさらにそともいさ二条院へとの給へとやりしろさ
ちかく宿にまるかち時をもちあれ　法あはれ事をつくる
よ俄よりかれなまりていけにはかなく給へ
大とこたち　細　夕顔の上を非とハ気をよかく源の大切

よし給ハつれなくへりしもあるや
つらかりし御心をもたとひ給ふらんかしさる事とハ侍る
物のしけかりしかハひきそれ給ひしかハいまさらにとハ思ひて給ひそさ絶
えたひてをかしきにさらひきこえらるへきなとはらと
ありけれと　私案　是ハ若紫の上をもう又条の宮へかへりさらハ出し
こゝろとゝハかはち歎て我をとおもしこゝろもにくへのいひ給ふ
むとをすにいひしくなとしもへつらしとも
さらんも世中ハある　世中をいふ物ハさはるかるをも源氏乃詞
詞也　細　源乃右近とをとりまそて慰め給也
別といふ物のうしうしぬるをなし　私案　杜子美ニ死別已呑
声ノ　生別常惻々　生死ともに別ハかなしき物也
さおなしもうき世にも今の限りある物よりなんはるとひ
くさめてもされと其の世の給ひなくへきと

私　生死ハ遅速こそあれ限ハ同しき也
かくいふ物をもさいさらあけのかなしさいかゝあれとの給
ヒもそのまましせすそさえこれにもあれ心をはなれぬらんも
やうつるも給ひまんやかぬれもかゝるかりの世のさき申にさても
をのはとのきるやうて此給ひ事にいとつゆまはしらしさ給ふ
いさことをもまくさを心ち給ふ　細　かやうに右近と申いふと
その世の世の中をとも又我身をもあやうくさへかしとも
あるまうくいちうてそつつるかなへ心ちまひつかへし
う　私案　夕顔乃家の秋れ姿乃まくらや
我くれなゐ井乃汲乃ところをやはるをといふあはれ人笑
あふつやをもいつらせかゝる清るみもといくしあちのう給ふ
まいき清かすなれしも又惟光そひさら給はまて給りしま
さもけるに　私案　是ハ河原院にての給しちからし給へる

源氏の注をと東山まてめしよせらるゝ義政殿にして注釈
教へさせらるゝ事くのことをおほしめし出るなり
法性の法とみえくもへるよりもあつかひそのまゝかとも清心地ま
とひをわれし　抄安　菩提人我川越へ流への多た境をつきそて清浄
河住といへはかさとを寿て境をとすてしなる也又清浄寺
と云寺をとえてことをるとかましたる者をいへ　防（ミセル）（フセク）
ちくはちふ見ゑかくをうまぬるのみやあらん　和云三千条一波

放埒（ハツ）

（古ヒ）身ハ境内をと云にもとをはなしつる者也しく多くの人をと云る人
ゆきにたえいふをいくもしかれの心ちあるかなる心のほかにもれたる所
なちうなうとひく　細　二条后へ参る後はこれなきりと也
わかろくしきハさの地をくものをみちうおみてやて女ある
色々ならちそういひて心あるへしなれをも川の中にかくこと

あらひて清みの魏書を称んしなりてをも　源氏いふ
の絡とも惟光の人かもうしき異見をとやむことて東山
なとまてハつれやましさ物をとも也　細　我身たりく
しくハ此清女とも諫やてきつもしくさ物をと惟光か後悔也
もへなく云ひさるを　栄　せんかたなく也　源氏の法さ夜と云り
免とも志ありて源氏をわろくして心のうちにはとかをを称んし
給ひて又せうつさとよもしれ給てあらん二条院へうへり給ひ
常のあやしう　細　源氏をも紅をも称んし給也
秋あかり此清ありきと　細　明白まて清心ち都しく給
思ひしに此清ありきをいへるあるやうとなる也
人くく見ゆるにきこはさされこのことはいふをもとも去川心あ
きほ志のひありきれくちしきを哉あらみをもさの肱乃清
なしさのいとなやましうおもしきりしにいつそかくた

とらせよとありきこゆるかしこよりあけはなれぬほとにかへし給
ぬかつきまいりていとこゝろほそく思ふ二三日にありなんとこそ
むすひにより給ふやうに志給ふ内よりこそめしあけし事給
つとめし給ふのりかたくにこそなりぬへき心地し給へる
也　二条院の女房達也
きこゆるとてひとはかくおほくさもあらしなと　檀なとかき
つとめて護摩なと焼かせや
せよとてとひ給ふゆかしき清水の御ありかそかしに
かくまし給ふさまやとはめの方されたる人のほとにあり
細　源の君とひ給ふこそくちをしく思ひてせうと不知通
なる殿ゐのあく人ひとゝ也
ところさしく清水よりこそとのゐ人をとめしおきてはかなかりしと
ちかく給ひてかなしさを給ふ　案　惟光あひて夕顔よ

一とせ条にや
惟光か純とさきもなへひのとめてけんのかけき
なしと云るをもまてなしそはきりくれかくそに
細　源の清水ちあしきみをかへらせたへともむ右近をとあり
つきんとするも源乃給かくしきとなれ給も
くるしけさりほかにおもひてかほさること也これハ　源清水
やこの詳たるへし
めしてはらひるをしのとほ給へくましらひつきたり
細　右近ともし出しも
ゆくゑもしらしてかきらるとよろしねともこれにかへる
しらぬゆへなり　案　右近とうさ宿也心ほしの程を
にりもて昭君のちかうすかれたるへし　河　清少納
言枕草子に云ゆくゑもしらぬ男のあたりてきた

おもしろき 源光行侍従成ける中務少輔也此物語の句を
切句として有る時宮にてさて筆をとらさせて右を
御前の時ふ且又隠密乃事也君臣不忠義とやらさるゝを
書るに清少納言筆をふるひおりて夢みて扨さとさ
乃まゝ書り此ことを志してけるへくハ脈の義をとらるるにて
又ところ〳〵やいりて猶書き欄遊乃字やけむ一も無
用常のことなりやもとへハ媼くらうゝく多くなりまゝやそ物
まとひとて宮乃義恵と云をさうしけるや一説脈宮上経
勅宣の脈と書くる枇杷大納言延光一生の同左村
上天皇清脈不得出仕さく此ぶ例を侍従成心女房伝讃尾
なると此義と云ふ有て中院乃ことなりまゝをた脈乃義と
在まゝ見めすゝく 光媼くるとぞまゝてちゝちき心清
お納言様言まうとありけしき説をむ志る事へし

細 脈夜の書ニ源氏也説ニあり不可用之 花 弄同
あやしうかくるも有る也あやりに別されて哀をよにえ
けるもしきなり 細 源乃右をとにの語詞也
我をとらにえあるまし記 細 源乃哀をあるかくへき記
とや幽玄まあらはれたる詞也
年比乃そのをうらるもひく心深うくさうてんなるさめてをき
しあらへくもようらつまそくてまんとてさて云ひう猶とゝもあく
抄 源氏右をたゝ心としまうきの語也 細 夕顔ノ巾
うるとゆとや
又さとらうかね〳〵きうロ打しまと有へきうれと思ひやうり
のほくうもきにるま記行へハ 抄 源氏と煙まのあわり語
さんとや 此詞おもとに幽玄やうゝと
いふうひゐすれるとハとさてゐてまうれしと云ひ出る也

私案　右さうゝ夕顔の法事なとハおこして源氏のふかくあはれと給
りんとの給へハさしもなき心也
唐乃うちの人おもとをすくなくひとつ内よりも法はつひ
花　二条院乃人也宮をおゆむ仰して也下知行よあり同
ろも也法こ法のり事をすゝむ室をはゆむと云詞ありさく
西乃おもよりもともにさたまし　私案　内よりもの法服乃たけ
さとなりて　河　藤さもともハ西脚と詩すと作まつり
おほしなをきれわりしまゝに法をとくく給ふとよ　私　色ハ禁中より
源氏乃法りをすと欺給よも也
いとかくし常たくあ　細　内よりも種々法んをはくらも給
と不孝なることくはなく事をもいとにくれ也
巻乃性しき也
せめてはよくおほしなる　私　志ありてもはよくなどにさまなる也能法

かゝかる乃行ん也
大后と御ゆくへをいめしく行ひく日ことに仏をも行けさ
まくれ事をとせさせを給ふまうしまゐや　私案　をいめいをおさへ
見も云也あく乃細よ鍵心よくけり上ふとも　細同之
分よ日いとわりくまつひ行へれともとする事にのこゝれ
行こゝ親之御よ力をし給ふ常りくひ御兄弟しと　兄行り
おまりともよむへし
むとりよみちぬる世なれなし　細　私　源氏乃法師よいむよるもひ
とりよ後なるもの也　襁褓と記もつよなる也
おほつかなしを給法心よりもなくて　私案　色ハ夫人子に源
氏とおわりなくおほしめす法ん乃よりもなれによう
禁中へまいり行也
うちの法也乃御所に参り給ちもとれ　案　さいりつ也

細 案内なる也

大臣の法事などにも人々まうでひらく 細 葵上の法かうさ

まとくめてわれたちまへせる也

法服いとをるふやとむつかしうはくしまをたまり給ふとれなとも

あられ 宗 大臣なとくくは法養生又ね法なると兼行まかも

ゆるねせまかへりたりやうに花りしてお成ときに

孔 荻生乃ちる跳し給と也

九月廿日のほとみそたくるもてまもて行ていとけうりあまや

せ給へれとあまりく心えしをなきめしうてあすめりもり

殿とのこにたなこ給ふ見えまきりとりむつる人をあらて法服のきを

ふめりあるといふをおり 孔 前よおとこあるを給ふと兼文旨

乃法なるへし八月十七日よりと廿日ちるるとと是

細 平愈(ヘイユウ)なり

右とをせめしいそこみのとやられ御文書に物語なるとし給て

孔 角は二条院よりくすぶなる心給へし

行いとなりんおやし給へるとてそ乃人むたえて給しとを

細 源のことなり也

かくい給へまりしそ 宗 かくし給也

まことにゆるりのこなりとも法きうかまさらにえとて今こそ

給しうそなりんはしりぬきしめその給へも 孔宗 前よ文数あり

なきあ給へと有時あまのまと源氏への給しほとに

あくにめ此ちるも

年をてうかくしかくし常よ行事は給ん 孔 右近のことなり

ともみえなくお見しめさしもの詞也

川乃ほとみそくうしそなにあしぬ法なのうを常よ行なん

宗 近衛とし給ふ此法要つみはいそてうちなまゝ宗行りんと也

ちかめつるをあやしう御覧しぬ法をよりけし法するなれハう
はくとも御覧しもてあそんはる中の給く　源氏の法名とか
名をつけて夕良乃宿へつかはしもめ乃ことゝは
やさし御覧しぬ法とたゝ夕顔乃行かりとぬ也言をとりや也
細　源のうるひそめ給ふことを御ひるもぬことにいひ給し故也
法名くしとさとむるもにてそへことゝ中を給あつるあとさ
つたにてそさ給わりし給ふつめとあんらにふすにおはしまを
しや中有なれとも　孤案　源氏乃法名をとくし給へ夕顔をよ
名そあの乃給をぬと云也其を源氏乃あら給たち
おもりしめをにまるそて法名をもまつかりし給ふめ
とうかつすにいふしや右をとりや也　細　源氏も名をかく
さもと給しゐあをとれりれるをそめおとよそく来とゝを
らぬおとよそく有へきとりや也云給し故也

あひおかりある心ちくへくもくれあるをあのをてはるちくるもお
らうとき　孤案　源氏乃法名也名をとひは法名をかくし給ひとそ
んらうへ中以りあるとをさうはとや
そうつやうにへてゆるさまぬかるまひとあんまもあるまぬ
事自然　孤案　世の人はもろうると云事の法詞也
細　思ひありきのもとや
うちにいさめの給はけるをゆしめつむをと御はうるあさつも
くれくへは主をもつわれしとゝいつと　孤案　夫子の源氏乃法名を
あるうとるをあし　世中をとせとくいふ給也
退(ダイ)躰(ヒョウ)給ふをはれやうにとや
ら給ひされ有の有さまあるを　細　我方乃人々とゆるさぬち
まそとそとこそ右をハツんあるへくれとや
まくれうらいるをあやしう心まうるそてあるうちにたるさ

てさうしとゝうへきちゝきこえにしそハ御しるしをもとめたまふ
をはられなるなん又うちゝゝしはらうおほゆる
哢　又条の宮かく夕霧乃花村なる時乃事をの給ふ也
かうなるつゝ給まし北かくハるゝとも心しる心ちゝして哀也おほ
ゆる給ひきる　細　一隈と心よえて心をれしハあるまし
きなとも也
あをくりしくかされい海ハすれ事をしるへきそ
細　源乃詞也
七日くの仏うつして色たちをもとむる心のうちかりと思けん心よの
給へし　私哢　七日くの仏をうつしを給て色活名を見る給ハ
ありれと廻(エカウ)向なとし給ひけんと也　七日くの仏をうつす経文
多宝(オホニコレ)地蔵十輪経(リンキヤウトウ)末二見(ニユ)十三仏来云　細　妙なる詩也
あなかちなるてうましきを給ひけんとつゝしむのひとくし給ひし

事とする北法うしろふろちゝきこえくやいと思ひ給かゝるもの
となん　私哢　夕霧の思ひくくははかなくて給へるこそあるな
らを給法給ひて口添ふあくやさしむやハを思ふらうそら
かてよろぬるとも　細　あらと々詞也あなうちかくもへきかて
きなけれとと現世ふくくつくかくし給しをとる北法
くもかくハ何とやあはれうらも也
親たちハちやうとを給ふさ　細　ちかよるまかくるといふ也
三位中将たるなんせのとし　私哢　夕霧乃父のるまとあとうやも
いと給うなき北物を思ひし給へりしそも　哢　夕霧を父乃思
ふことをうるる也
我方乃給の心もとなさをおほせてめあしに命たへ哀に給も
をおはし後ちりれきものたようるかく院中将まさおほろけ
物し給ひしとれみそめたましを給て三なきをもうるもハ心得しある

さ夜まかよひ給ひし也　私案　三位中将乃宮なると思ひまぬ
なりと歌給ふに今は人なくして行かれ成給とも也
こそ乃秋の比大臣右大臣殿なり　私案　風吹ハと読し時
のなり也　在中将夕顔との契三年計とミヽ二年めに三輪
とうかり四年めに源氏あひ給ひて又年めにうつりて西面
へうつりしと知るへし　細　七年と八四十年也
ひとおそろしき事此宮にしおはしてあしくに物おもちをわりなく
志給ひし清心なせんしなうおほしおちて　私　在中将
む御なり夕顔のうへおそろしきことをも思ひわれ
とし給とや四五人乃御ゆゑとのことも也
みの京に給めのとの乃まことに給るやところにあんなひしてられ給
為りしそれをいとかんなしきにすまひ給て
紙　湯殿かの妻の母也

山里にうつろひなんとおほしけりしと　旅本あるへき
引寄　給ひて今ハさるまじき山里にうつろひへき宿もとめてん　清擬
おもしろきところたるかたに給されハさもとて
私案　山里ハ西也　五条乃そとめに此又五条の家へ出給と也
あやしき所にものし給しとみんあくるに物まちかちかしとて
おほしかけくめりしよの人はふまて物はかなきとし行て人は物を
思ふらし此とみえんとをかし此物わりなく思給へく
栞又五条乃宿へは遠ハ出給とも也
つれなくのこまてなくして清らんせしまつ給ふなめりしなやと
私案　夕顔乃心をおもはあらくほしとの心也
かるきやうにされたうとおほし給はをてやよく給ハれは
さりぬ　私案　源氏乃在中将不定乃物語の時乃給し人ならて
思ひ給たを給ふ也

わさと人ゝとりしきる事也中納言のきこえし所ゝの事とも
ひ給ふ　細　子のあるりと聞給也
さりともしの春そてまゝの行へりし　栄　さりはさやかに見し
此云心也右にとう詞也
女みこいとらうたきにあれん事なめ　栄　むつかしや
いていけたにそ人ゝまさとは春しきて我りしまさおよはとも
かれくるんし事思ふ時うかんにいとう続しかる人事とあれんとの
給　花　源氏の清詞也人ゝまさりとは春しきて源氏のよえき
せ給しせよ也
かの中納言もはかなく人それとひをひすれうしとおもひなん
花栄　ぶ中納言のむねて來給行て源氏のもとにきこえ給たる侍
宮給てりは色のうけに短給りんと也　細　ぶ中納言もかう
さくハこ給へ人とも給るもあうさ波とさしきましせまうと

語行ハ源の也いかさ波源乃家清子のもとおほせも也
也源氏のうさ波はつきてちくをまんにとらあるましきさと
是あらんめの也るもとみとも　花　夕顔乃ゆかりんとひふ又源乃
清子にとの心也
あと清くにふひなすし御物をようしるとかなしひ給
花　源の清くる人也ハなうくて也也
源しもいとうまつりをあんあん待へきうの西乃京みちくおもひいそ行
りん事心くるしうあんあくしきあいりふ人あすしとて
栄　出もとう詞さ清くきも也
うしこたにあん也なめ　栄　玉鬘と西京にあいりふ人ありかく
てわたりしほとと云心也あくうしこの女也ことを云心也
花　西乃京のれる也
夕霧の三河かあらにさのきしきいと哀をおもへ乃家載出の

ねをもなきたまひてまくらのやうくくるほと猶まうさくあつ
やかにねもしろきと見ゆかして心よりほかにおもしなまし
らひ給と　抄　夕顔乃宿より右近か孤てとりやうにたてまつ
ちなる源氏の詞らくにあきらかとしるし也
かの夕顔の宿とりをとらひいつくもなくし　細　かのやとりをと
源の名残しも此詞家乃有さ夜を見るに待ちつくしさ也
行乃あるに家たちとくいまとりとの名前くにあるくをしめ給へく
抄　世俗りはちられたるとく云々
ものあはし院よ此とりよ乃ちかひしをいとおそろしとおもひ
しけき此面くをにらうたくおもひしいてられ八
某院
鵺のなくろうに似たる猿なれとさみしあしは只鵺のなく
を云て彼河原院の事とと云出給也此なるの此と云事のとを
のなるせ云心を見るへき也行乃年にとあるよう源氏乃右

心也　弟　鵂のこゑをきゝて梟乃鳴しにいひかるゝ敷
なるし鵂ありはしむつるに鵂の鳴をきゝて彼院にて梟此
なゑを女乃おそろしと思ふし夜をおとり出給成へし
此なるの鳴しをよるてまたの聲をとと云也云ふことりしきに
や彼院あまくも此なるのきかしおるへし　細　其院とも河
原院也院よ此とよき切てなれ鳴しとを読説ありこの也云
詞そうくひまのちもにやもとめ詞よとく説也此とられ八只
もとのこゑよきこえてろまをと云出てるも由もあるへきにや一説
只あはし院を読く此なるの鳴しと読るにあり此河
原院よは綺自名鳴しほとに鵂のなく事もあるへき也それ
をと云出たるへし　物語みも前よ鵂乃河原あるまし哉
にむつくし此河原ありてやうにんを庭りてみ其八おもちに老字
年八いく何ふくまの給ひしおやしき世の人よみにはうゑちり

見え給ひしもかくなかるましくてなりけりとの給
於 源氏乃夕顔のよはひを問給詞也
十九にやなり給ひけん　栄 右近かいふ也
右近はなくなりにける御めのとのすておきて侍りけれは
弄 右近かはゝも夕顔のめのとなりし也　細 右近ハちいさくなりて
ある句 乳母乃子とや也
三位乃君のらうたかりてかの御あたりさらす
於栄 夕顔乃御あたりさらすと也
おほしたてゝ給ひしを思ひ給へいつれハいかてか世に侍らんすらん
おほしたてゝ　生長セイチヤウ トモタチトモ云事也
いとしも人にとくやしくなんものはかなけにものし給ひし
人の御心をたのもしき人にてとしころならひ侍りけること
月奇 いふとていとしも人にむつれ給ひてそみ…

於 給ま夕顔にむつれたるゆへに今ハくやしきと也
ものはかなひたるこそ女ハらうたけれかしこく人になひかぬいと心
つきなきわさなり　於栄 源乃詞也女ハ物ちかなるをよしとする
やすらかなる也
みつからはかはかしく　於 源氏乃詞自を我との詞也
すくよかならぬ心ならひに　河 健スクヨカ 菅家後集
女ハたゝやはらかにとりはつして人にあさむかれぬへきかさすかに
物つゝみし見ん　於 人の目にハそしれともやはらかなる女の物
従ふを源男乃心にハあはれとおもはんと也
見ん人の心にはしたかはんなん　細 先乃こと也
哀にてわか心のまゝにとりなをして見んになつかしくおほゆ
へきとの詞也　栄 女によらす男乃心のまゝに見んとする也
見ん也

この詞ハ此前にまてたすね給ハ詞乃心とも思ひ
給ふるをも口惜しく侍るかわきさる事とてなく　孫宗　源氏乃詞
このよ此世とくちをしき夕顔乃詞なれともたすね給ふ事
くち口惜とてたゝくさ尽也
空乃うちくもりて風ひやゝかなるにいといたくなかめ給ひて
孫　時雨乃心をあらく常陸乃地乃詞也
見し人の煙を雲となかむれハ夕乃空もむつましきかな
弄　空のうちくもりてたゝならぬしきさへなかめ給ふや　細　時雨
くもれる空をもむつましうなへし九月廿日餘乃空のもよしおもひなしと云ふ
為し源氏乃意也
世にもむつましき給へとも心にいつへくも覚えしにと　弄　右とよし
かゝもちてさらんやまつしてき風かと感ありき　細　右とよし
ととよう詞かく見てきへかし此と新集の詞なりけり

て詞いへくへと斟酌あるなるへし
夕やうふくおもきをましらえせたふみをむかしたのえとく
ある詞也　宗　夕顔のおりしくまさちを右とかう心とに空也
細　此二条院よりやうやうおりしまさを空也
見なうしく侍うなしきぬきの音をおほしいつる心へ共し
なてまきし　孫宗　夕顔の宿かくれきぬきうちしこと
源氏乃おほしいつる也
あふれともつれもんしふみゆ行つ　河　八月九月正長夜
千聲万聲無止時　白氏文集
あのよ乃家へてよ心承おもれと　細　又とともと将して
空蝉乃すとも此出すとも物らるゝ此出挨ひ給
あとにありしやうなりとはすくもし給ひハ　細　とハ空蝉
まさ信給ふことともなれ也

うせ給ひしをりにこそ紙にとかしをしらせ給はかくれつゝ給ひ給
ときゝて　抄　あはれとも思しをしらすにかくのやうに給
侍ると思はれはいとかしと空蝉乃思ふ也
給ひてにうちあけきこえまほしき　抄　源氏乃給ふやうをも空蝉
乃歌ん也
とかくいふもあはれなる紙さしにおほえられは心得
ぬらんと　抄　前の女をは人にあはれて空蝉をつれてゆかん
むせかへりて家にかへりしに思ふ君は伊予の介へ行んとや
するらし　細　伊予のくたりて下るとや源乃思ふやし
行と心にもに又清き例をも思ひこしおほえられや
あはれにも語りけれやむをまとにいそくもえんて
抄　空蝉乃文の詞也心にはまた語ると申したるまてあ
まはとにいそくはえてこそせんは思ひことを詞まへきんまし

てえし待まねとも空蝉か心ありしや　抄又　源の清らかに
るるをも頼るやむといひつれとてもあるなれとあと
にいてもとひぬ
とかぬとも心をとなりそしてほとあるにいつくもしく思ひて　まうすか
ほんそして空蝉のとひをつくもぬを何とてかへぬるかはあれ
たよりは御結ひぬるを思ひ也まつ源氏の心まよひゐるるとせ
花　空蝉乃方の思ひまよひぬとは源氏乃病悩をといふよまへよ
めり御語をぬはまよひ行数とをしきる家心也とく
弄　源氏乃方やを行ひしとも空蝉ははかうまてとひき
らぬを源氏を又方よりみぬとも書へ語りてほとよ
あとをと空蝉はなくいひよりぬよし也とく　細同
細　此方の給句をかるもいひよりぬと旨源氏乃病悩を
いひよせて此方の御語はへ数語数とをしもとかく思ひとま

是ハらて此本ハこひみてるやおりふしをまつ日本紀
花 御乃詞なるを奇へうをてかくる人きや
まほしくハかしとにきんしや書しきう　宗　いまうひ本
ほとゝいらん為也
引 孟 いぬ哥もなうし侍らん是もおちまへのいまうひ本季
源氏乃ようしひ給ふさ哥そいあるうひ本紀とふらせよ
早下れ心をあるまや
かうしさにこれをあられ三重詞そた　孟宗　前ゝ詞返
事をいへきれくし行人乃とハあるまさするを此玄作
ハかつくし紀ありくへし　細同
いあるうひ本紀やまさひしまえとにり　源氏乃あまさ
よる上すそいまうひとちらし紀宗螢乃はまちら紀外と
いまんと出会よ奉れさするとの給との人也中ゝすとかいる

以下自を射してひくる奇妙　細　見ゆるを源乃文の詞也
哥ゝてまうすこれいまうひ本紀と物語とく宗螢のう
たゝうるもかく申ゝをこうれちす紀ぞや
うれをこの世ハう紀物也玄りはしをまうこと此をくしく候令よ
花 宗螢の世と侍むるしき世也とハ也此給ふ事とちれ給
てそれふとの家よ令とう申さるを也　細　ちられきまの
也此ひまそしをえうやうにとられ給てまことの家り令
とうもをさまるとも也　河万家明　宗螢の世ハ常ちすしと云る
物と杜風宮らと出ひはらうをと
ちられしやも法てをうちわさうかしにそれうさ給へるにと
ものかくしあり　宗　病後の家ゝひよ法よかるうまや
女統の此まぬもをさ上は玄給ふぬをいと非しうを物しうを
思あり　孟宗　宗螢の源氏乃法文奇をかくへく宗螢乃世

とふらひつるは命をぬきさしへしさるをぬを給ふを
忘逢給はぬ結んとや　細　空蝉の段也
かやうにふくつけきはいとうしろめたうさもあらくさにへいさひかう
まて　弄　菩薩の梵刹乃詞也空蝉のかたといひたり
浅きをうたて思ひなる事はつかしはよりてやさしなんと思ふる
子斎り　宗　これはふくらはまいらんとしてやましきとや
細　空蝉を一向まかきをも頼まて八ヶ年も作すへし
かのうつせみはかくへう人乃おかねをもかんかまへいとこころに給ひ
宗　彭もの萩や
おやしきかたにさかへんとお将乃あなかち心もいひと打しく
弄　源氏の契しことをもし殿人のかねさゝあらへいひとゝれ
しきとの源氏の結んや
又かの人のきし花をゆしかれを　弄　彭もの萩乃なるや

こゝろしてあふかはりさやあるを許つりやとふひつつみに
弄宗　とふ給の結をえてひとゝハの結をてたく彭もの萩をとふよ
何やうにの給ふにや　細　源乃詞也たくあるかに御給へる
ことをへりけるを面白し
ほのかにも彭もの萩をむすはすは露のかことを何にかけまし
弄宗　露をかくると契りしとはほのかに契しゆへとや　扨ハおかねに
契ゆへにそれとかけかはりやうとハ契かけ也　細　一夜の
ちきりをもちろくハかやうみもしおほえてましきとくきと
くちきにとやかくとをかうけ申や
さとりやかれる萩よつまて思ひくせの結つれとなるとおやま
ちてかねとこゝつまて　弄宗　後撰　大将　かならつ
まさかうかりける家に待しに萩乃葉をさしにとさし
てはなりし事也

山里の秋さひしきは萩の葉風ならてはおとにそよひやらん
我なりなりとも也とおもひあはせたるは行きもゆるしてんとそ
清心行にけるそ　細　源氏乃好色をしおさへける綱也
あはなりけるとなり　玖　不可説清心中也
かねつるす也わりにみえまされし　宗　古人に有あるぬまさ也や
細　かねのちす也ゆりにと読さかてある也し心うしと云そ
也ハくやうの行き倍ハ心うしとも云へとも也
くるし也なる人也　玖宗　新きの萩れかねよ哉なりけりや
うに清よ文すとおもへんハ今まされと三諸ぬ也行ちをそとも
かく投はしてそるもさはるそ　細　思三諸のぬとを思う
名思あり
清かへるとなちやさきそるるとも志とみえくそし　玖宗　玄ハ
よろしくねとも口とく清夜てりやしとうこ入かなへ本ゑかり

とくきと源也
目乃めくは風よつきてとも下萩のならもハ露にむすふれは
宗　目のめくは風とハ源氏の喜信様よつきてとも下萩さい
さくら早ニ下ケれ心あるまやならてとは源氏と中ねとのる
をとひむきをも目し語心也露ハむすをはゐる縁よりな也
細　あすくし也あるを源氏とかの将とのことをとひむまそりくれ
とも云説ある也めす只と語るし行ふするにて上中本ハ上ひむ
をも目すし也云ある人し　玖　喜信行よつきて中ハんの
むすとほくれて見ゆるくとる也よりや
てはあしきをあるをまたうしてされしてそ源行くきる
なし目きにみえかた投はしそてらる　細　此人ハ南世投よ
てさの三可説人ともみえとゆるよし悪皆見へとかも
うちとくきもむかひあるへくるう也ここそるまし投さ悔をとまうち

しかれ共人の心をもおもひきとも有くかうと也ほこりぬらし
よと思ほしめしたにみてかうかは　宗　おほ方おもての萩なりむ
かひさらんやとあをしとおるまて源氏乃君なりし出る也
あさとありはてにみてもあさゑたちぬへき清心のもとさいふなめり
古　ありけるに又とはちきる花の立ぬへし人ふかうゝぬせみもとき人ハ
かの人々宇千九日也ひそく　抄　夕顔乃七々日也前ハま宇
九日也と有
記ゑの法花そうかくなとそうれハ　宗　かんつとやくせちハ法
新人をやうなも也　細　人をとゝめてとるもはくしめて法
法ある也前よおとちてや侍とよくせよ也ある也
あくみくなる人へし
法かうをよりそしめて　然ありちゝく法揃よ列也
さるへき揃をこゝよにもてひるとせきを経　出経紙乃かくり

まてねかうあるくハ惟光のかたさるといえとそうらうと人
みてみあらしあまとも　抄　法花堂へあまりたに不揃法経也
法文の師にみくむつましきを思ほしを　抄宗　源氏の法事之乃
師匠をとちよけるも也
まんたうもち始めて　宗　文章博士　儒者乃ある也
願文はくらきを師みその人せるもちくてなそれとそひく人のまう
あはれさ侮よあつかるとかかる紙よゆうりけのあるうし表也
うれハそ行へ生は　願文　日本紀　河　清和天皇貞観九年
十月観学院南辺定建一院号延命院自制表願文詞多不載写之
と纔ヲ見ル例ヲ乃也
元重明親王家室藤原氏乃四十九日の願文後江相公朝綱
出之見文粋　生者必滅釈尊未免梅檀之煙　楽尽哀
来天人猶逢五衰之日　云々願文之詞也云々

さらくかくおもしろへき事ゆへさめりやすこし世の山行へ
まと清らゝとこられなかくとも御覧されハ
弄宋 源氏都文はくらゐいて文章博士よりも行人を一字す
書かゝるゝや只日本の字の中詞也
なふ人あらしんてろ人の中ゆめくもなくてうち思ひしあけれは
ちからもありあんまくせのなるさせかひろり 弄 めしさすら
ひ路人をいつれ者人の字か儒者の事也
思くてうをはやらへりあるかうらるゝをもうをとるを
行て 宋 山人はうにとて用意のもう度也
あらくもまゝハかゆき下ひまるといひ山里の世かうとあまて月ゆへき
弄宋 山人はうらはなる度よりもと山里行てめにしら白ゆかひもと
ないり乃世にらかもろとハ来世の孫(サイクカイ)にをと思路心なるへし
細 施し路待にあとしれ路さ度也来生の勝命ゐらすもやと也

いほとまてハたてるゐるといひ道乃程よりはしまりて物をも
むくらん心思ひ移りてに御をれとも路いとはかれよし路をも
弄中将も九人路のこともあいなくもはかりなくて 弄宋 中院
四十九日まて是中有にさまようふ心也七々日をも行
ものゝまの度にはしまるの心也
かゝるそしこれ御いらに有さ度さうをさなうしくとれ
細 むつかしや
かしこにおちて打出路さる乃ものゝ日のやうなるを見てさいつる
みとせひらさ人心をまうまうにそれ弱きくは宮とそゑにとて
はまてねもおやしと云ひあけきはへり 宋 弄中将のあかゝ
さんてしおちゝくや
たしうるかねとあそひをさとうるとなやとはくめれしくれ
宋 源氏ともそなしうおもしぬと也

惟光をうらみきこゆれどとかくまきらはしきこえつゝありくほどにひたすら
て　細　是ハ光源氏惟光をうらみ給へるなりと推してしられたるをあ
らぬさま也
惟光すらしらぬよしなれハいとゞあやしき心ちして
花　夕顔のある所のことくすゞろにおもひわたりたまふとや
もしかのあまりの子どもなどかくれしのびたる光源氏をまたもとめ
てやうすをみてさぐらんとさるゝにやかくはおもひよらるゝ
花　夜中ねにおきられぬ夕顔を部分をとりてつれてくるか
とや又条の宮のへくるなる也
この家あるじそ西の京にあるとのむすめありける三人ぞ
乃子也なく　夕顔のめのとの子也もとのいはく三人あり二ハ
宮仕人也兄弟なれど又条の宮へ行也右近とも夕顔
のめのとの女なれどそのめのとハちやうとさるも別のたれ

とや　弁　揚名（ヤウメイ）妻ハ嬌女（キヤウジヨ）也又一人ハ侍くして任付也一人
ハのりつききこと　細同之　むかしの巻に見えしたり
右とハおとゞの人ありきれハいひあそてあ　細　別のめのとの子也
語角にてかとこそもぬありあるとせちぬをひきかると
栄　夕顔のゆく方をたゞしくにあてゝさくをたまへ
きこゆるとや夕顔の宿の人にれんをとりつ
たとへさうしなくてよひさえたまんと思て　栄　右近を
夕顔の事とて又条の宿の人くにておさえたまんとを
いひくるとや
君もとゞめくにまいらせし事にかぎれ人も　花　源氏も右近ハ也
いく君の人とともにまぎらはしきさまにくゆく方なくてを
きゆく君ハゆめとたふれんちやせねのしやるにてのほとし
をかひて又の秋のくれになし院ありてこそひたちうしなの

ちることもおもひやうみてみしるれもあれはらし石にもとゝまる
む物の名にみえつれきんたる木にかくありぬる也とくおほしい
つるふとゆくしきこなん　わか君　栄　玉くしけのるや女子を
ともわかつ君と云年わかきさかりのあり
あれそかりし所に行ちん物乃　新栄　河原院に行ある麿か
源氏に団とみえつれある物也よ夕顔の巻にあれて夕顔の
名やうに旅路かと云也とそひたりし女と八清自見給のみやや
つよのもみを神の月乃ほつさまのうちまくいむ女房のさうらんに
とて　細　幣まてむこさみく別して仔名ちるに餞し給也
をむまを心ちとにせさまを給ふ　たなむまも也郷音礼又醮禍
餞別ノ送物也　又云　手向　或酎　祭礼具也
又うちくみとわかさとし給ひく　栄　仔名あくあまうちく
へ宮蝉みとし給也

このやうにわかしきたちあるくしおかうきおほくし事
栄　幣をむもとほられたる袋をとまつりそくるれ旅立此物ら也
扇又常のうち也　訳　御扇とのく旅乃物也　河　洲　際家
鏡台へ下乃时中宮より鏡に扇をとほらし有る
あるしさへ此乃松原にほるとも其扇乃風ふよほまりて
ぬさしるをわかさとうましうる　緩麻　幣ふて道祖神に
手向る故にぬさと振人の旅物に古来しある也
此たびはぬさもとりあへず手向山紅葉の錦神のまにまに　菅家
黄帝四十修子あり云名累祖旅行乃遊を好く殿不宙宮
中道旅程てるみく死ぬる时懽曰我為神旅行此客を
まもるへしと云み此道祖と号まて今の道祖神是也人の
旅に趣时餞送とつるハ此故あり餞送乃所を祖席といひ
此道祖神を世俗にさへの神ともいふまた又手向乃神とも

云也ミ二

かのこちるとはかれは　打聞　まぬき乃衣とハいへ文化てう

ちるさへ桜の装束ハ冬乃衣なれハさぬとてうしてはら

ちんぬへし十月一日のはくてうるへきよしわかもちろちき

にそへへ申桜乃衣をとはかれはとかんるへし

わかまてのかくるんちるをやかてはどに見さはる袖乃くちにまるや

心ハ御也ちうちるさをとあかまてみをとめたるあひさに袖乃

ちらちたるとも　細　逢まてとこうかやとも袖ハこりぬ也

なと　あかまてれ形見とてよそやくめちめ洞まうりふまく川なりなり

ちらやられ為ことくもあまいそうあさされハかれは　打聞　見も

例乃以ふ式アラ筆はも花まの地也

法はうひかるまにきれとこ見しててちろされ法在たるをかへし

さをゑらさ　栄　小見の卯に法役ありとかんしたり見えく此始

さくらをしたへともか論也　七十三

せミ乃はもたちかへてある夏衣ハにとかへても着ハなかれまう

打聞　十月一日更衣の装束をちらちそえてはうハされぬる

にけるを云なへてあるものくうらのまぬきをといひきりして

うちきさをとひとなし行へハうちたにとかへてもなるなる云也

思へ也　栄　源氏の語詞也これはとにおもひ行へとも也

細　源乃心也はらく云あるを思へとてハ云也

あやしう人はみぬ心はよさみてもあるをも見まぬるかなと思ひ

はくを給ふ　かうそれまて　栄　伴与へ下向乃かとをいへり

夕すきを云川日なりきうをもあるくうちきこれて交乃まかしき

いと衣なるをもあらめくへし行て　細　云夜也汚ニ冬川のさも

し色濁（ニゴリ）てけしきうくつく可清也

るうしともあはるてもニ度に行ふを云つぬ秋乃これうつ那

私案 さてみしやハ夕顔のことゝかゝるくもとハ空蝉乃かるゝ也それと
二人ともに十月一日なれとも秋乃くれかれとよめる也やう
なりかゝるを光乃巻々も此歌ハ伊勢物語のうたにもれて
そこなとて秋をはる年のうちに春をいくらもあるへし
也古人も三月盡乃哥よめるをいくらもあるぬとよめる也やう
なり 細 十月の哥ちるを秋乃暮されとよめる餘情おほし
然也 哥の此やうの所に心をはくへきなと有りあへしいま
ハ暮と秋との中に冬をハ入る也拾遺集にも雑春秋
乃中に冬をの哥ハ入おけり
なをとかく人まよひぬことハくるしき事なりを思ひしるへくぬくらう
私案 夕顔のことを空蝉の事ともいひ出て思給ふ事
也こそ云しやハ是ひまとを給ふらんしともや 細 心もとなき事
子細也と 案 此一段ハ帚木乃巻の発端の光源氏名のことこと

くしうといひけたれ給ふとがおほかなる末乃世まていひつたへき
語人の物いひさかなさよと書り又こゝにおなしくかく
隠へ忍ひ給ひしもいとをしくてとゞめたる事帚木乃詞よ
まさらに至て源氏の好色乃事をあらはのまゝに書付くるを
又やみんとふ事を以てかく此一段ハ帚木の発端と結する
語と見るへしたゝかやうにかきて見侍れハ心ふかき源ちる光年
かやうのくたくたしき事と云 案 此一段ハ物語乃總志の網なり
思ひ給ふもいとをしくしてねとも漏つ乃御子なれハと
とて何とてあるまじきものかはぬるやみん人のかたほならぬと也
まれるものほめかちなるもあれ又あしきさまとありたるを作りことさ
んするハさしとの作物語めきて物ほめかちなりしとるか
もとへのあるなれハ何事のまゝにかきりされハあまりに罪
いひさかなき罪さるよしちなれとつゝるかや罷角云てまと

皆源ことや
花
此一段ハ物語乃作者の詞也清つれすなりともよそなりと
ハちんとおしきこととハ何しれことふかく肖へきを一向す
すもしせたやさくのあるやうなれハ何のまくにすへし
とかくあるとや本すもへるも物語の作とおもふりを出た
れ一本あれとも是れハそのうちを花折裏し前略し
てうつしさまとみるふやうつれを見れはさるをとや
きと花同之
あまうちにかくろへ思ひ給ふるをいとおしきてみなまほし
やくめさるをとみそとの清子なしんうけれんくさへすき
ひなくもて物語めうちもる所とはさるをめさてもうあまに
ひともの中行ひきれもなんあまうさものうひさくれきつたまう
ところなく　くろへ思ひ給へし　細　夕顔乃上のことを気帰

乃ことなるとや皆此事をさるほまし花と気思へれと
ころ源氏ハ桐壺の事れ清子ちるる喜をさそへまとそこそ
えかりしてさあきたし私(ワタクシ)あるそしるとも侍へし又實録(ミツロク)の
心まをるうはあるをのまくにさるほとてさへし
まくしあることをあるへし也